

50023

教科書文庫

5
300
34-1948
200030
1653

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

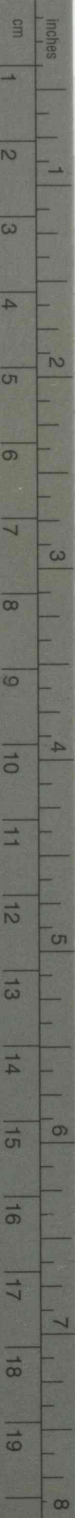


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

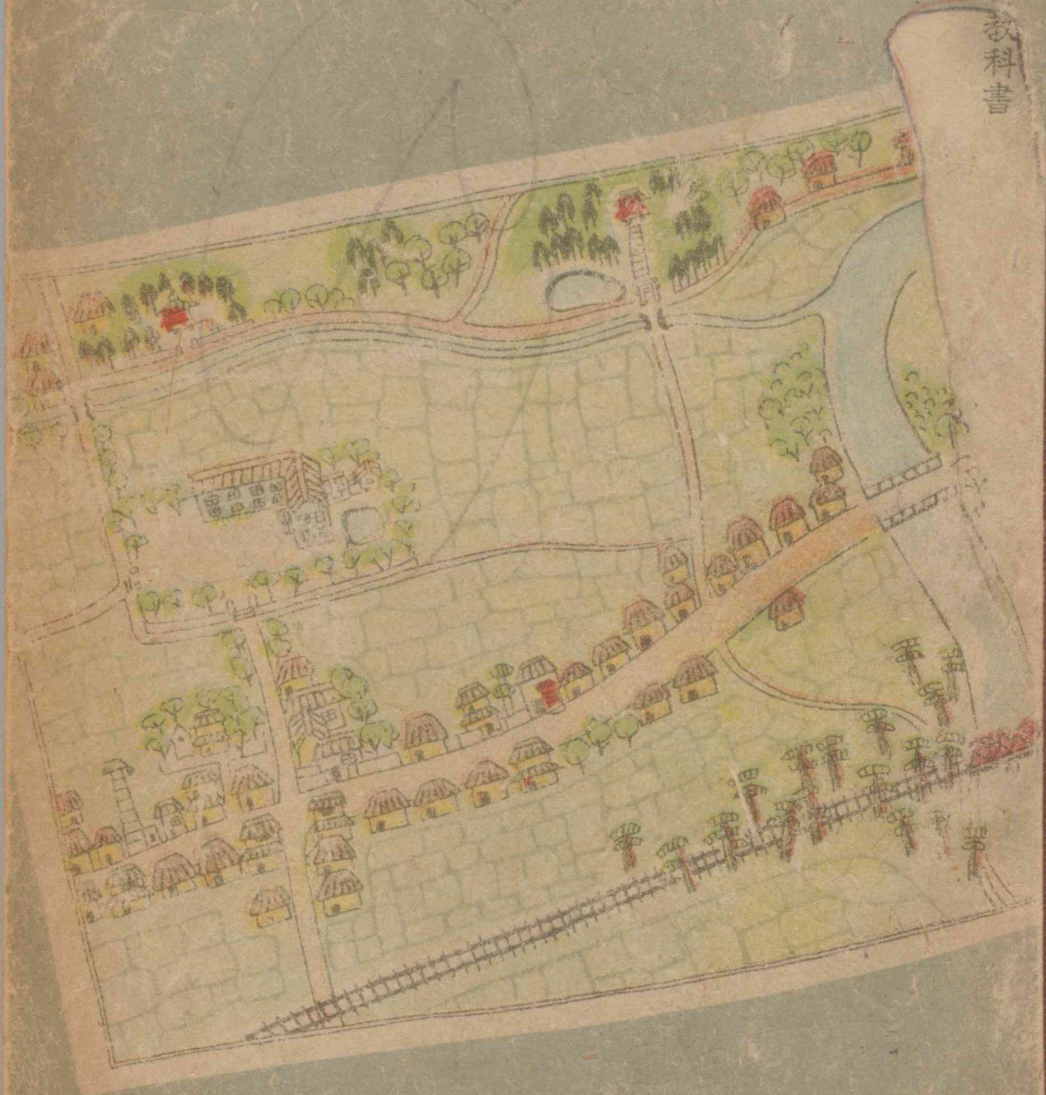
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省著作教科書

村の子ども



私たちの生活 (一)



325.9
M014



いはばし

たるみの

もくじ

一、五年になって……………	一
二、委員 会……………	八
三、さまざまの協力……………	一七
田うえ(第二はん)……………	一七
田うえ時(第三はん)……………	一九
大昔の狩(第五はん)……………	三五
昔の漁業、今の漁業(先生)……………	三三
漁業部落の見学(第四ばん)……………	四四
まぐろ延縄の話(第四ばん)……………	四四
四、誕生 日……………	五五
五、夏休みの計画……………	七〇
六、夕御飯のあと……………	七六
七、町からの手紙……………	八五
八、新聞やラジオのなかった時代……………	一一八
学校へいく路……………	一二三
(附) 教師及び父兄の方へ……………	一二三

一、五年になつて

三郎君もいよいよ五年生になりました。急ににいさんになつたような気がして得意です。教室も二階になり、窓からは運動場で下の学年の子どもたちが遊んでいるのがよく見えます。しかし三郎君の得意なわけはほかにあります。それはこんどから、おとうさんのかわりに、毎朝牛乳をとり町の集乳所までもつていくようになったことです。

五時半に起きて、床をかたづけ、顔を洗い身じたくをして、牛小屋にいくと、おとうさんが、牛乳の輸送かんを用意しておいてくださいます。三郎君は、それを自轉車にのんで、すぐ出発するのです。家からとなり町の集乳所までは、およそ三キロあります。だから六時半までにもつていくにはおおいそぎです。けれども、このごろのように氣候のよい朝、縣道を自轉車をとばしていくのはゆかいです。ことに松崎橋まではくだりです。すからいい氣持です。

三郎君が口笛を吹きながら走つていくころは、もう春の日はかなり高くあがつていま

教科書文庫

5

301

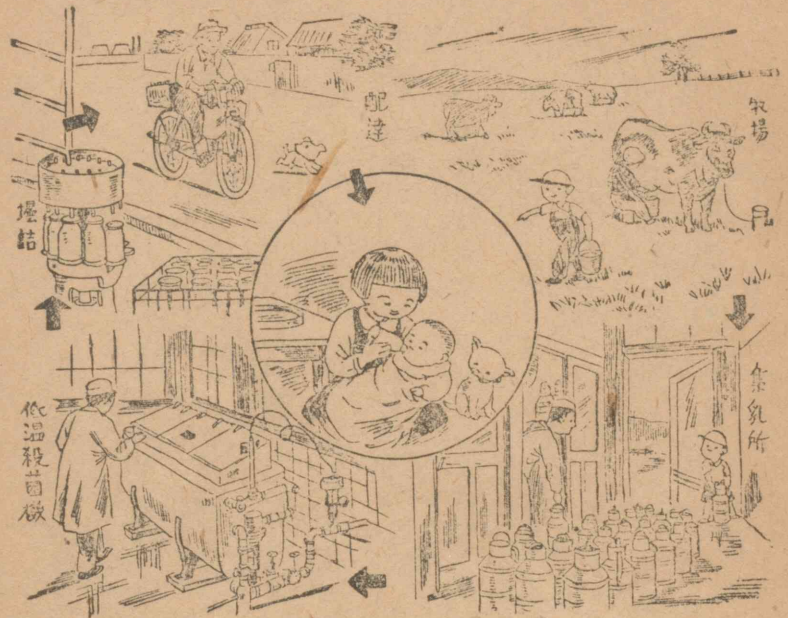
34-1948

2000301653



2000301653





す。右がわの家々のかげになつてい
 まう林のむこうから、太平洋の波の音
 がきこえてきます。あたりの麦畑から
 は、しきりにひばりのさえずる声がい
 ます。たんぼでは一寸そらまめがいっ
 ぱい実をつけています。西の方の山々
 にはかすみがかかっています。鎮守の
 森をはずれると急に景色がひらけて、
 右手に海が見えはじめます。そしてそ
 のむこうに、となり町の家々があらわ
 れてきます。松崎橋を渡ると、道は少
 しのぼりになります。これまで三郎君
 は、ここからのぼりになるといふこと

をあまり感じていませんでしたが、重い輸送かんを自轉車ではこんでみて、はじめては
 つきりとそれがわかりました。橋から集乳所までは、約一キロですが、いきにはどうし
 ても汗でびつしよりになります。集乳所につくと、組合の人が「御苦労さん」といつて
 輸送かんを受け取つてくれます。三郎君は、この無口な組合のおじさんがなんとなくす
 きで、御苦労さんといわれるとうれしくなりました。

帰りはたいそうらくです。橋の所まではすぐきてしまいます。橋の所からは旧道を通
 ります。道は少しわるいけれどもだいたい近道になります。帰りにはきまつて、橋のとこ
 ろで上の山のいさんが銀行にいくのにあいます。そして鎮守さまの裏手のあたりでは、
 松山先生ともよくお目にかかります。松山先生は、一昨年となり町の学校に御榮轉にな
 ったのです。上の山のいさんも松山先生も、三郎君を見るとにこにこして、「よう」
 と声をおかけになります。

家に帰ると、たいてい七時少しすぎになります。からの輸送かんを牛小屋へ置き、自
 轉車を土間に入れ、井戸ばたでからだをふき、手足を洗つてあがると、もう朝食のした



くができています。おかあさんは、いつでもコップに牛乳をいれておいてくださいます。三郎君は、このしぼりたての牛乳をのむのが楽しみです。往復六キロの自轉車のりのあとでは、たいそうおいしいのです。

朝食をすませて、かばんに入れていくものをもう一度しらべているころには、もうおとなりの弘君がさそいにきます。弘君は三年生です。学校へは、近くのものガみんなさそいあわせて

いくのです。途中で鉄道のふみきりがあるので、三郎君や近所のくに子さんは、とくに下の学年の人たちを残さないようにつれていくことにしています。

学校は三郎君の家から約一キロ、村役場のとなりで縣道に面しています。三郎君もくに子さんも學級の新聞係の委員ですから、教室にはいると、すぐ揭示板をしらべたり、投書箱をのぞいたりして、それから道具をおいて運動場に出てみんなと遊びます。

こん学期のはじめ、先生からのお話によつて、三郎君たちの組は次のようなことをきめました。

一、人々の生活のしかたを進んでしらべよう。

二、自分たちの生活を少しでもよくするためにはなんでもしよう。

これが、學級の標語になつて、教室の前の壁にかかげられています。字は級長の山本君が書いたのです。學級新聞も、この標語を実行する方法の一つとして、學級自治会できまつたことなのです。學級新聞の委員は、三郎君やくに子さんのほかに、上田進君、金子すみ子さん、上田はる子さんの三人がいます。毎週木曜日までに、學級のものガみんな

なに知らせたいと思うことや、みんなが知っておいた方がよいと思うことを、ニュースとして紙に書いて、投書箱に入れておくことになっています。そのニュースには、なるべく絵をつけようときめたのです。ニュースのほかに、歌や俳句や詩やなどなぞの問題などを出す人もいます。金曜日の自由研究の時間に委員たちが集まって、これらを壁新聞として掲示板にはり出すもの、とうしゃばんにするもの、口でみんなに知らせるもの三つに分けるのです。はじめはなかなかうまくいきませんでした。このごろはみんなむちゆうです。委員は金曜日待ちきれず、木曜日の放課後、すみ子さんの家を集まってえりわけをし、金曜日には壁新聞をつくったり、とうしゃばんの原紙を切ったりするようになることが多いのです。きょうもたぶん、すみ子さんの家で委員会をすることになるでしょう。

次のような事を考えてみたり、してみたらどうでしょう。

- 1、朝学校にくるまでにすることをしらべて話しあってみること。
- 2、集乳所に集められた牛乳は、どこへいくかをしらべてみることに。
- 3、近道のごうのよいところとわるいところとを考えてみることに。
- 4、きまつた時刻にきまつた道路を通る人は、どんな人たちかしらべてみることに。
- 5、登校の途中の安全に関する注意を書きあげてみることに。
- 6、一つの道路を選んで、ある場所の交通量をしらべることに。
- 7、学級の標語についてそのよしあしを考えてみることに。
- 8、自分の研究しようと思つていることを表にすることに。
- 9、学級の人たちの手つだいのありさまをしらべることに。
- 10、病気の予防法をしらべることに。
- 11、学級新聞を発行することに。

二、委員 会

すみ子さんの家は進君の家のはなれです。おとうさんは東京の病院にお勤めで、一週間に一、二回お帰りになります。すみ子さんが一年のとき、この土地に疎開してこられたのです。ふだんは、二年の正雄さんとおかあさんと三人でくらしていられます。土地の人たちも、病人ができること、すみ子さんのおとうさんのおせわになるので、東京にお帰りにならないといいな、などといっています。

荷物はほとんど進君の家の土蔵にしまつてあつて、八疊と六疊の二間に台所ですが、たいへんゆきとどいた氣持のよい生活をしていらつしやいます。木曜日は、たいていおとうさんがいらつしやらないので、新聞の委員たちがおじやまするのです。八疊の座敷のえんがわよりに、テーブルを出して、みんなで相談するのです。

テーブルの上には、みんなの原稿がのつています。五人の委員は、めいめい、それをとつて、楽しそうに読んでいきます。

進「石井君のところでは、もう苗代をつくるそうだ。」

はる子「まあ、ずいぶん早い。」

進「きつと村でもいちばんだろう。」

すみ子「どんなことが書いてあつて……。」

進「うん、読むよ。きのうおとうさんが種もみをえらびました。かめに水を入れ、塩をまぜて、種もみを入れ、よくかきまわして、浮いてくるのをすくいとつて、沈んだ種もみだけをえらぶのです。塩をけんやくするために、二斗もある種もみを、何回にも分けてするのでたいへんでした。ぼくはえらんだ種もみを、ま水で洗つて、塩けをのぞくの、手つだいました。おとうさんは俵に入れて、裏の川につけました。苗代田は、もうすきおこしがすんで、水がはつてあります。二、三日ちゆうにしるかきをして、種をまこうといつています。ぼくが手つだつてえらんだ種もみですから、じょうぶな苗に育つてくれればよいと思つています。」

種もみ、種もみ、

うんとすえ。

流れの水をうんとすえ。

みんなそろって

つよい苗になるんだぞ。」

すみ子「まあ、おもしろい、石井さん、ずいぶん、りきんでるわねえ。」

三郎「石井君はきつと、苗代のニュースをつづけるよ。」

進「みんなも、きょうそうで書くよ。」

くに子「新聞が、たんぼの話ばかりになってしまいわ。」

はる子「そんなことはないわ。蚕かぶこのこともあるし、遠足かぶこのこともあるし……。」

進「そうさ、いろんなことがありすぎるくらいだ。」

くに子「ほんとにそうね。だけど、新聞も、たんぼのことばかりのせるのも、ときには

おもしろくないかしら。」

三郎「たんぼ新聞、たんぼ新聞つくばろうかな。ハッハッハ。」

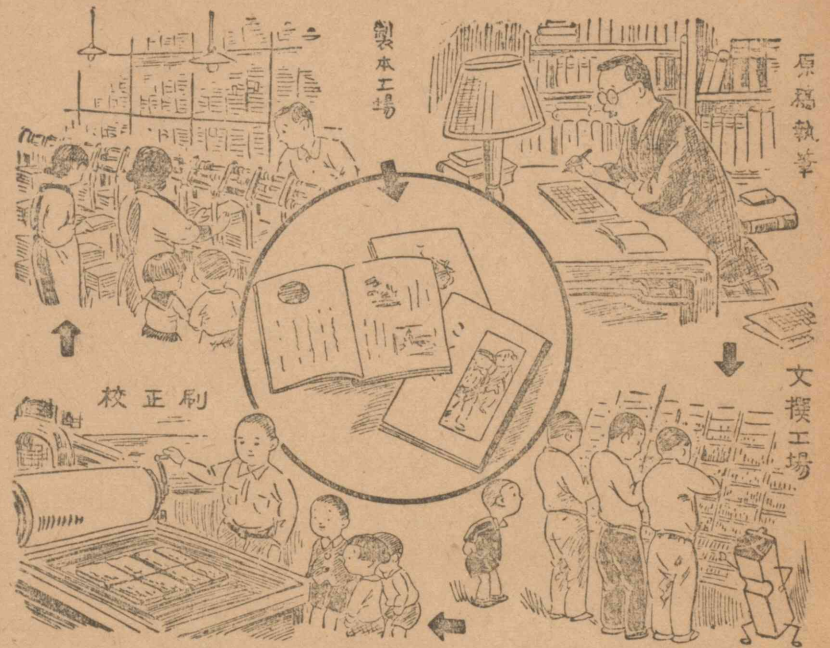
すみ子「でもそれでは、新聞らしくなくなってしまおうでしょう。」

くに子「そうね……。」

ちようどすみ子さんのおかあさんがお茶をもつてきてくださいました。これは遙さんのおかあさんからよといつて、どんぶりにそらまめの塩うでを山もりくださいました。すみ子さんは、テーブルの上を片づけて、みんなにすすめました。お茶をいただきながら、みんなは原稿を見たりしていますが、三郎君は、さつきから何か考えこんでいるようです。時々思いついたようにお茶をのんだり、そらまめをたべたりしますが、しきりに頭をひねっています。しかしほかの四人は、自分の仕事にむちゆうで気がつきません。

「ただいま。」と元氣な声がして、正雄君が帰ってきました。おかあさんが、「手を洗いなさい。」といつていらつしゃいます。となりのへやでおやつをいただいた正雄君は、

三郎君たちのところへきて、「ぼくにも見せて。」とねだります。すみ子さんは、「ちらかしてはだめよ。」といいながら、絵の多いのを五、六枚かしてあげました。正雄君もなれているとみえて、おとなしく、絵を見たり、字をひろい読みしたりしています。



三郎「進君、ぼく、こういうことを考えたんだけど、どうだろう。」

進君も、くに子さんも、みな、三郎君の方を見ました。

三郎「さっきのくに子さんの考えね、あれはおもしろいと思うんだ。みんなが、たんぼのことをたくさん書いてくれるときには、それをだんだんひとまとめにして、本にしてかいらんするんだ。村のたんぼとかなんとかいう名まえをつけてね。」

進「作文のかいらんみたいに？」

三郎「うん、そうすれば、学級できめ

た、人々の生活のしかたをもっとくわしくしらべるといふことも、みんなでやるといふと思うことをみつけるのも、もつとうまくいくと思うんだ。すきかえし・田うえなんて、おとなも子どもも、馬や牛までみんなで作るんだろう。みんなのお手つだいだつてずいぶんあるしね。」

くに子「そうよ。三郎さん、うまいわね。わたしも、なにかそんなような気がしたんだけど、三郎さんがたんぼ新聞、たんぼ新聞なんていうから、おかしくなったんだわ。」

進「ハッハハ。でもいい考えがでてよかつたじゃないか。みんなや先生に相談してみようよ。」

はる子「口絵を入れたり、きれいな表紙をつけたりしましょうよ。」
すみ子「みんなきつとさんせいよ。山本さんなんか、だいさんせいなんて、とびあがるわよ。だけでもう少し、内容を考えておいたほうがよくないかしら。ふつうのかいらんと同じになつてしまわないように、みんなの書いたのが、うまくつづいていかなく

「ちゃだめでしょう。」

三郎「そうだね、みんなも、きつとそれをきくね。ぼくたちで計画をつくってみようよ。」

五人はしばらく話しあつていましたが、まもなくこんな案ができました。

本の名 たんぼでの協力
 編切 農はん休みまで
 内容 はしがき
 もくろく

口 絵

苗 代 とり入れのころ
 田 出 供 出
 田うえ時 ぼくたちの仕事のいらん表
 たんぼの水
 田の草とり
 二百十日

仕事^{しごと}がわきみちにそれたまま、だいぶおそくなつてしまいました。三郎君たちは、おおいそぎで、壁にはるものと、するものとをよりわけると、テーブルをかたづけ、すみ子^{すみこ}さんのおかあさんにごあいさつをして散会^{さんかい}しました。三郎君とくに子さんは、帰りにもこれからつくる本のことを話しあつていました。

新聞の委員たちの考えは、そのつぎの学級自治会^{がくきゅうじちかい}のときに、みんなで、いろいろなおしたり、つけ加えたりしましたので、こんなふうにかかりました。

本の名 さまざまの協力
 編切 六月末

表 紙……………美術はん
 はしがき……………新聞はん
 もくろく……………新聞はん
 口 絵……………(けんしよう)
 田うえ時……………第三ばん

養 蚕 …… 第六ばん
茶 づ み …… 第一ばん
大昔の狩 …… 第五はん
昔の漁業、今の漁業 …… 先生、第四ばん

次のような事を考えてみたり、してみたらどうでしょう。

- 1、疎開してきている人たちの職業をしらべてみることに。
- 2、疎開の人たちが村のために役だっていることを考えてみることに。
- 3、種もみの保存のしかたやまきかたをしらべてみることに。
- 4、苗代のつくりかたをしらべてみることに。
- 5、本ができあがるまでのありさまを、昔と今とくらべてみることに。
- 6、自分たちで本をつくるには、どんな準備が必要か考えてみることに。
- 7、自分のいる場所や身のまわりを氣持よくするくふうをすることに。
- 8、みんなの意見をまとめ、きめられたことを実行するには、どんな注意が必要か考えることに。
- 9、委員のえらびかた、委員としての仕事のしかたを考えてみることに。
- 10、学級の人たちの学習する態度をよく見て、自分の態度とくらべてみることに。

三、おととあさの協力

田 うえ 第二はん

ことしもつゆをむかえて田うえをしました。

私たちのおとうさんおかあさんは、かさをかぶり汗を流しながら、牛をおいおい、一年じゅうたべるお米のつくりはじめに、苦心なさいます。

このころは、もう感心なつばめが日本に帰ってきています。「やあ、帰ってきた。」とみんなで迎えながら、田うえの仕事をします。おとうさんやおにいさんは、牛につけたすきのうしろにつかまりながら、どろ水の中をいつたりきたりして、田うえの用意をします。

この用意のできた水田には、なわをはり、おかあさんやおねえさんが苗をはこんで、水田にはいつて手早くうえていきます。

おかあさんをまつている赤ちゃんは、田のあぜ道にしいたむしろの上で、小さなにい

さんやねえさんに子守^{こもり}をしてもらっています。おかあさんがそばにくと、おちちがほしいのか、ベそをかいてだかれたがります。するとおかあさんは、どろの手を見せて「だめだめ。」とくびをふります。赤ちゃんはききわけがなく、なきながら、おかあさんにだかれようとしています。おかあさんはあやしなから、「ほら、とつと、とつと」とつばめをゆびさします。赤ちゃんがその方を見ているうちに、おかあさんは、またいそがしそうに田うえの方にいわれます。

ひるごろになると、学校にいつている一、二年生の子どもたちが帰ってきます。赤ちゃんもうれしそうに笑い、手をふるようにして迎えるのです。田ではたらいていた人たちも、そこでおべんとうをひらいたり、家に帰ったりしておひるにします。おひるごろは、たんぼも一時静かになり、おべんとうをたべている人たちの笑い声や、かえるのなく声が、はつきりときこえてきます。

ひるからは、またみんないっしょうけんめいに働きます。夕方になると、馬や牛もだんだんつかれてきたらしいようすを見せます。それでもみんなはげましあつて、暗くなるまでやります。

もうあちらこちらにうえつけのすんだ田が見えてきました。そして、ひるまはえんりよしていた、かえるのなく声はげしくなってきました。

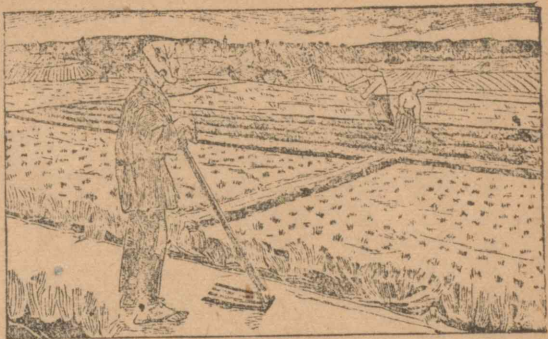
これは、ともえさんの書いた文です。二はんの人たちの、田うえのようすを書いた文の中で、ともえさんがえらばれたのです。

田うえ時 第三ばん

田うえの時は、一年じゅうでいちばんいそがしい、しかしまた、それだけ楽しみも多い時です。おとうさんもおかあさんも、にいさんもねえさんも、おとなりの家の人も、手つだいの人も、牛も馬も、だれもかれもがいそがしい時です。

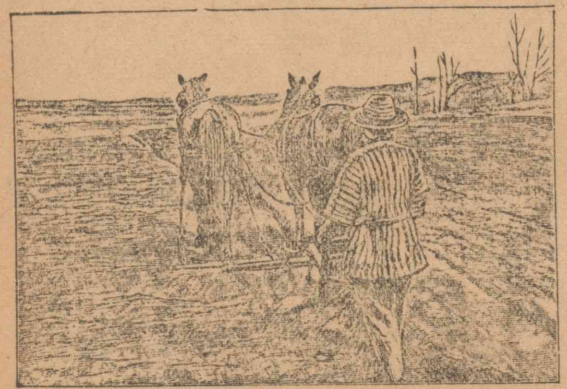
見わたすかぎりのたんぼはどこも人でいっぱいです。年よりも子どもも、男も女も、家じゅう、村じゅう総出^{そうしゅつ}です。よその家、よその村からも手つだいの人がきています。お茶やおひるのときには、あちらでもこちらでもにぎやかな笑い声がします。

ぼくたちは、田うえのときにみんながどんなに助けあっているか、ということを考え

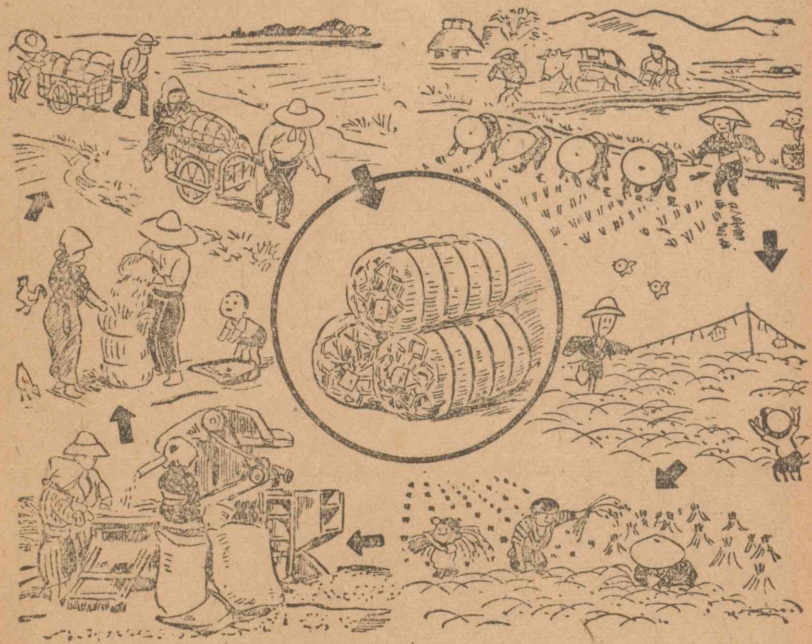


かんたんな道具を使って、
田畑をたがやす人たち。田
畑をたがやすには、どんな
道具があるでしょうか。

馬の力をかりて土地をたがや
す人。馬や牛は、そのほか、
どんなふうにして、人々の手
だすけをするでしょうか。



トラクターを使って土地を
たがやす人。どんな所で使
うとつごうがよいでし
う。



たりしらべたりしました。

一、田を起すには、牛や馬が、ずい
ぶん人間の手助けをします。牛や馬の
いない家は、なかなか骨がおれます。
牛や馬を借りてやる家もあります。牛
や馬もずいぶん働きますから、田うえ
のときは、特別にごちそうをしたりし
て、いたわってやります。はなをひつ
ばらないでも、どんどん田を起してい
く馬や牛を見ると、ほんとうに感心だ
と思います。

二、牛や馬のひくすきや、人のつか
うまんがが、仕事の進みぐあいに関係

することもたいしたものです。これらの農具は、村のかじ屋や町の工場の人たちがつくってくれたのです。田うえの前には、どの家でも農具をしらべて、ぐあいのよいように手入れをしたり、たりないものをととのえたりします。

三、起した田には、十分肥料をやらなければなりません。つみごえは家ごとにつくりませんが、金肥がたりないので、このごろは、どの家でも苦労しています。農業協同組合の配給では、なかなかたりないといっています。組合のおじさんにきいてみたら、肥料がたりないのは、たくさん肥料工場が使えなくなったり、原料にたりないものがあつたりするためもあるが、やはり石炭や電力がたりなくて、工場の生産があがらないからだと教えていただきました。工場の人たちは、それでも食糧増産の源ですから、いつしようにけんめいにくさん肥料をつくるようにつとめていくれるのです。また石炭を掘る人たちも、肥料の生産がどんどん行われるようにと、夜も晝も、地下の炭坑で働いているのです。ひとにぎりの石灰窒素にも硫酸にも、石炭を掘る人、工場で働く人、製品を輸送する人、これを配給する人たちの、たんせいがこもっていることを思うと、田う

えには、こういった人たちもいっしょに働いているようなものです。

四、おとうさんたちやおにいさんたちは、牛や馬や農具や肥料の心配をするほかに、水のことや手つだいのこととも相談しなければなりません。田うえはその年のみのりにたいへん関係しますから、村では、昔からみんながよく相談しあつて、みんなのつごうがよくなるようにくふうし、助けあつています。水のこと、耕地整理のできている所ではわりあいにくですが、そうでない所では、なかなかたいへんです。毎年のしきたりをもとにして、よくよく相談しあつて田うえの順番をきめ、助けあいのしかたをきめます。

いよいよ田うえにかかるとなると、どうしても手がたりなくなります。ですから、近所となりで助けあつたり、となり村の人をたのんだりしてやります。疎開の人たちでも手つだう人があります。金子さんのおかあさんも、上田さんのうちの田うえを手つだわれるので、みんな感心しています。

五、田うえのときは、どこの家でもいそがしいので、炊事もおかあさんがしないで、

お婆あさんがなさつたりします、子どもも、お茶やべんとうをたんぼにはこんだりします。手つだいの人がきたりすると、炊事はよけいたいへんです。前には、^まの村でも、部落によつては共同炊事をしました。食糧があまりきゆうくつになつたのでやめていきましたが、そのうちまた行^{おこな}われるようになるでしょう。

六、三年から上の子どもは、家の手つだいができるので、農はん休みになります。一、二年の子どもは学校へいきました。赤ちゃんはまだよいのですが、はいはいする子や、よちよち歩く子は、どこの家でもしまつに困ります。また学校へはいる前の五つ六つの子も、おかあさんたちがいそがしいので、うろろうして、あぶないことをしたりします。それで、大きい子どもたちが子守をします。西の部落では、疎開の女の人たちが女子青年と相談して、農はんたく児所をひらきました。砂場やぶらんこでもきました。町の女学校からも手つだいの生徒さんがきてくれました。

七、田うえのときは、一度に手がたくさんいるので、どこでも非常にいそがしく、みんながほんとうに氣をそろえて働きます。だからたいそうゆかいです。みんなの助けあつている生活が、どこにも見られません。私たちの研究はまだまだたりないと思ひますが、みんなでもつとつけ加えてください。」

これは三ばんの人たちが、話しあつてまとめたものださうです。

大昔の狩

第五はん

私たちは、大昔、まだ人間が今日のような便利な生活をしていなかった時代に、人々が食物を手に入れるためにどんなふうをし、またどんなに力をあわせて働いていたかをしらべてみました。

はじめは、なかなかよい本もなく、どうしてしらべたらよいのかわからなくて、たいそう困りました。先生におうかがいしたら、「村役場にいる森さんが、たいへん勉強家で、本をたくさんもつていらつしやるから、何かあるかもしれない。あした森さんにお願ひしてみますから、もしよいとおつしやつたら、いつてきいてみてごらん下さい。」といわれました。

二、三日たつて、先生のお話があつたので、山本君とよし子さんが役場にいきますと、

森のおじさんは、大昔のことを書いた本を何冊も見せてくださいましたが、そのうちでいちばんやさしいのをお借りしてきました。

しかし、みんなで読んでみると、あまりいろいろのことがたくさん書いてあって、どうまとめたらよいかわかりませんでした。一時は、やめてしまおうかとさえ思ったのですが、しかしみんなで元氣を出して、読みながら必要なことだけを書きぬいてみました。

ところが書きぬいて、こまかく読んでみると、はつきりしないところや、わからないことがたくさん出てきました。みんなで字引もひいてみましたが、それだけではまだまじだはつきりしません。そこでもう一度、こんどはほんのものがみんな、森のおじさんにわからないことをおききして、そのお話と本の書きぬきをまとめて、つぎのような文にしました。

大昔の人々は、自分が住んでいる土地にはえている植物の芽や、くき・葉・根・実などを取り、自分よりも力の弱い、あまりすばしこくない動物をとらえて、食物にしてい

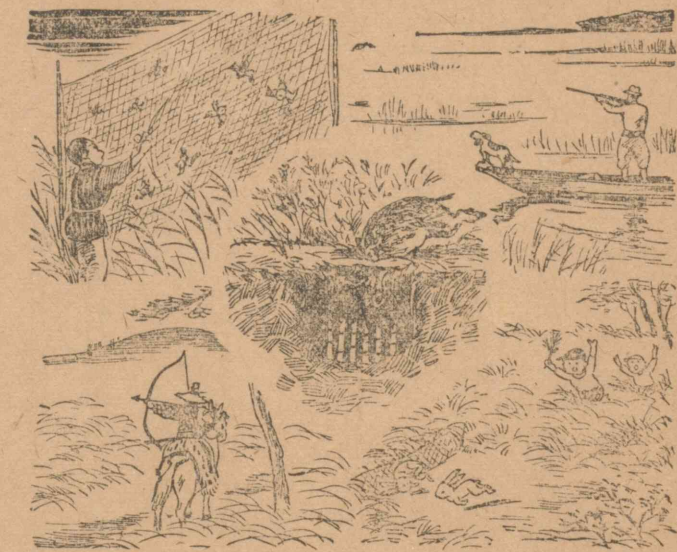
ました。また、動物の皮や、植物の葉などをきものにし、自然のほら穴などをすまいにしていました。それは、あまりほかの動物とかわらない生活です。身やかに食物になる植物がなかったり、動物がいなときは、野山をかけまわって、さがしてあるいたことでしょう。けれども、一日じゆう野山をかけまわっても、えものが手にはいらなかったこともあります。そんなときには、食物がないままでもがまんしていなければなりませんでした。

そういうことをふせぐためには、えもののたくさんとれるときに、できるだけたくさんとっておく必要があります。木の芽、草の芽のはえる春さきや、果実がみのる時期、根のとりやすいころには、いっしょうけんめい、それをとって集めました。魚のたくさんとれるとき、けだものがたくさん集まっているときなどは、もつともよい機会です。しかし、植物の場合は、逃げていかないからよいのですが、動物の場合は、足やつばさがありますから、へたをするとたちまち逃げられてしまいます。

人々は、動物をうまくつかまえるために、いろいろなくふうをこらしました。はじめ

は、ただ手でとらえたり、手ごろな石や木ぎれを使って、これをなげついたり、ついた

り、さしたりしていましたが、やがて石にさいくを加えて、なげやすく、ねらいやすいようにつくることがはじめました。また弓を發明して、矢のさきに小さな石のやじりをつけたり、棒むちのさきに、するどい石や骨をつけてやりにしたり、あるいはまた、かんたんなしかけのわなや、落としあなをつくって、動物をとるようにもなってきました。



す。だれかがふとしたことからよい方法を思いつくと、ほかの人たちもそれをみならい、

さらに新しくふうを加えたり、ほかの方法をあわせ用いたりして、いろいろな道具や方法をしだいにりつばなものにしていったのです。

たとえば、草のくきやつるは、一本だけでは弱い、これを何本かよりあわせれば、ずつとじょうぶなものになってきます。このことを発見した人があつてから、人々は、それをみならつて、じょうぶなひもやなわをつくるようになりました。一方、木の枝や竹の枝が弾力だんりきにとみ、これをまげてもすぐもとにもどることを應用かつかうして、前のひもを使つて弓をつくつた人もありました。矢ははじめ、細いまつすぐな枝を使つてみたのでしよう。すると他の人々もこれをまねて、さかんに使うようになってきます。

またある人々は、石ころをたいたりみがいりして、するどい道具にすることを知つていましたが、だれかがこれを矢に應用して、矢のさきに石のやじりをつけてみました。ただの木の矢よりは、石のやじりのついた矢の方が、うまくえものにあたり、しかもぶつりと深くつつ立ちます。また、ある人々は、石のやじりをつけることは知らなかつたかわりに、矢のうしろに鳥の羽をつけて、矢をまっすぐに飛ばせることを発見し

ました。この二つの発明がむすびつけられて、石のやじりと羽のついた矢ができてきました。

この弓矢のできた順序は、はたしてこのとおりであつたかどうかはわかりませんが、しかし、はじめからひとりの人が、りつばな弓矢をつくるようになったのでないことだけはたしかです。一本の矢にも、数知れない人の発見とくふうとがふくまれているのです。弓矢ばかりではありません。きものにしても、家にしても、その他の道具にしても、どれもこれも、たくさんの人々の努力と苦心がつみかさなつてできたものです。

人々は、はじめ、人間よりも力の弱い、小さなろまの動物だけをとつていました。けれども、いろいろな方法を考えつき、しだいにりつばな道具をつくるようになります、それを使つて、すばしこい動物や、大きなけだものもとれるようになります、だんだんと自信もつてきました。

けれども、せつかく動物の大群をみつけても、そのうちの一匹を殺してしまうと、ほかの動物は、すわいちだいじとばかりに逃げさつてしまいます。これでは、どんなにくさんの動物のむれをみつけてもなんにもなりません。ことに、大きな、力の強い、おそろしい動物の場合には、ひとりでは手も足も出せないわけです。

ですから人々は、そのような動物のむれをみつけた場合、あるいは、動物のむれをみつけないとする場合、近所の者がつれだつて出かけていき、協力して一度に全部をとらえようとなりました。

アメリカには、バイソンという野牛が非常にたくさんすんでいたそうです。大昔のアメリカインディアンたちは、このバイソンのむれをみつけると、部落の男が全部出ていつてこれを三方からとりかこみ、大声をあげたりさわいだりして、バイソンをおどかし、しだいに谷の方に追いつめていきました。バイソンは人々の声におどろいて、人のない方へ逃げていき、とうとう谷のがけからころげおちて、死んだりけがをしたりして、人間にとらわれてしまったということです。

こんな場合も、大群にむかつて、ひとりだけでかかったのでは、かえつてバイソンのためにやられてしまったかもしれません。みんな協力したからこそ、一度に多くのバ

イソンをとることができたのだと思います。人間がほかの動物をずんずんひきはなして、やばんな生活から今日のような進んだ文明の生活をするようになったのも、一つにはほかの人のよいやりかたをみならつたり、それに自分でくふうを加えたりしたためですし、また自分のちえをほかの人々にもかして、強いけだものや、自然の暴力の前に、力をあわせてきたためです。

昔の漁業、今の漁業

先 生

大昔の人たちは、野や山で鳥やけだものをとるほかに、海や川などで貝や魚をよつて食物にしていました。

狩のほうは時代が進むとともにだんだんおとろえて、毛皮のとれるけだものいる北の國をのぞいては、ほとんど楽しみが主となってしまいました。しかし漁の方はだんだん進歩し、現在でもこれによつてくらしを立てている漁師の人たちがたくさんいます。もちろん、今の魚のとりかたは、昔のとはずつとちがっていますし、漁師は、自分たちがたべるために魚をとるのではなくなりました。とつた魚や貝は、これを賣つておかね

にし、そのおかねでお米や野菜や着物を買つたり、住居や家財をととのえたりしているのです。一方そのおかげで、町に住んでいる人や、海からはなれた土地や山に住んでいる人も、魚をたべることができるようになっています。わが國では、魚は動物性の食品としても、農作物の肥料としても、きわめてたいせつなもので、漁業が重要な産業の一つになっているわけです。

大昔の人は、どんなにして魚や貝をとつたでしょう。網もなく、つりばりもないころには、どうして魚をつかまえることができたのでしょうか。貝は潮のひいた時に、浜やいそを掘つてとればよいのですから、あまり苦勞はしなかつたことと思われれます。しかし魚は、そういうわけにはいきません。

あなたがたが、なんにももたずにいそにいつて、魚をみつけたらどうしますか。きつと魚をせまい浅い所に追いこんで、手づかみにするでしょう。大昔の人たちも、はじめはそんなやりかたで魚をとつたのだと思います。

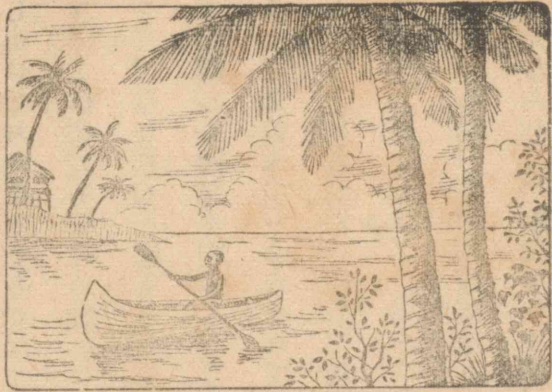
けだものをとるのにやりを使うようになってきてからは、魚をとるのにもやりを使い

ました。しかし大昔はやりといつても、さきは金属でつくつたものではありません。とがつた石のかけらや、けだものの骨などでつくつたのです。これで魚をついてとるので、海や川の岸にいて、水中の魚をつくばかりでなく、だんだん深い所にはいつていつて、およぎながらついたり、もぐつてついたりするようになりました。この魚をつくことは、現在でも方々でやっています。たとえば、つきんぼうといつて、もりでまぐるをついてとる方法は、房州ぼうしゅうの南の海岸の漁師がやっています。くじらをとるのも、このやりかたの進歩したものといえます。

人間が金属を使うようになったのは、たいへんな発明ですが、どこのだれがはじめたということはいえません。しかし、おそろく何代も何代もかかった経験の結果だつたでしょう。金属を使つて魚をとることがはじまりました。つり糸も、きつとけだものの毛をよつたものや、草や木の強いすじを使つたことでしょうか。つりでは、深い所にいる魚や、沖の方にいる魚をとることができません。しかし沖でつるには、舟を出さなければなりま

せん。だから二人か三人が組になつて、魚をとりにいくようになってきます。それとともに魚のとりかたもだんだんくふうをつんできて、ざるや網をつくつたり、やなを川にしかけておいて魚をとつたり、つばを海の中においてたこをとつたりするようになります。これはおもしろいばかりでなく、手かすがかからないので便利です。「なわ」といつて、なわにつりばりをたくさんしかけておいて魚をとるのも、つりの進歩したものです。網にも四ツ手網のようなものから、じびき網やだいぼう網、そこびき網のような、さまざまのものがあらわれてきました。魚の習性とか、およいでいる場所とか、いろいろなことを考えにいれて、しだいに網の種類も、網によるとりかたも進歩していきま

た。いわしは、この地方ばかりではなく、日本じゅうどこでもたくさんとれる魚ですが、これはたいいてい網でとります。じびき網などは、二百メートル以上もある大きなものもありますから、漁師がめいめいでもつてゐるわけにはいきません。だから、部落や村の人たちが共同でもつていたり、網元といわれる人たちがもつていて、おのおの漁師がそ



の網元に属しています。ほかの魚をとる大きな網でも同じことです。こんな大きな網をしかけたり、それで魚をとったりするにはみんながほんとうに助けあわなければなりません。また魚は、いつでもうまくとれるとはかぎりませんから、えものを分けあつたりすることも、おたがいのためにぜひ必要なことです。じびき網を引くときには、船の人だけではなく、浜べにいる人がみんな出て手つだいます。また魚見うみみといって、ふだんいわしが沿岸えんぎによせてくるのをみつける役目の人もいなくてはなりません。漁船をつくつたり、いらぬ時に浜べにあげて手入れしたりすることも、みんなが力をあわせてやらねばならない仕事です。もちろん大昔の船は材木を組みあわせたいかたでした。またかんたんな丸木船まきぶねでした。しかし道具の十分でないその時代では、そのような丸木船をつくるのも容易なことではなかつたでしょう。木をきりたおして枝

をはらい、皮をむき、けずつたり、くりぬいたりするのは、とても一人ではうまくいきません。だから、みんなが力をあわせて働きます。したがつてその船も、はじめはみんなのものだったのです。いまでも部落や漁業組合で船をもっている所があるのは、そのころのふうが残っているのだと考えられます。

そのうちに船もだんだん進歩して、板と板をじょうずにあわせてつくるようになり、一方では船を自分でもつ人もできてきました。船をもっている人は、船をもたないなかまをたのんで、いつしよに魚をとりいき、とれた魚を分けあいます。今でも船の分けまえをとつて、あとをみんなで頭分けにする所がたくさんありますが、こんな分けかたも、みんなが五分五分のたてまえで力をあわせていた昔のやりかたのなごりでしょう。船をもっている人がだんだんお金持になり、みんなの頭かぶになると、はじめから人やとつておいて、船のせわや、漁の手つだいをしてもらうようなことも起おこてきます。

船のほかに、網がだいいじな道具となる場合にも、おなじようなことが見られます。船も網もみんなのものであれば、とつたものはみなで頭わりにし、船の手入れも世話も、

網をほしたりつくろつたりすることも、漁のときのいろいろな仕事も、みんなが力をあわせてやります。ところが船や網がだれかの持物となると、その人たちは、他の人よりよけいの分けまえをもらつたり、他の人をやとつて働いてもらつたりするようになります。こうなるとかなりこみいつてきますが、それでも、おたがいが助けあつてくらしを立てていくということにはかわりありません。

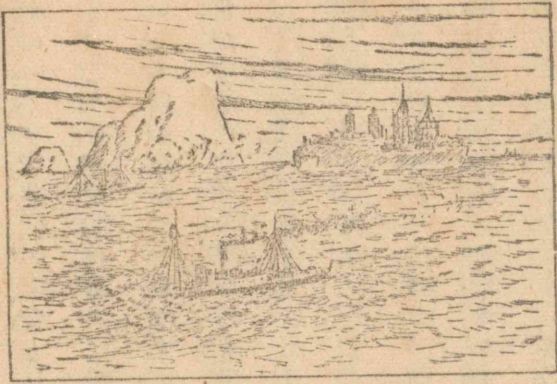
魚がたくさんいてえもの多いうちは、だれがどこで魚をとつてもかまわなかつたのですが、魚が少なくなつてきたり、また魚のとれる場所がはつきりわかつてくると、漁場というものに対して、これを使う権利をやかましくいうようになりました。この村は海のそばにありながら、漁業で生活している家は一つもないでしょう。浜にきて魚をとる人たちは、みなとなりの町の漁師です。これはこの村の浜の漁業権を、町の漁業組合がもっているからです。この漁業権は、村や町や、あるいは組合がもっていることもあり、会社や網元といわれる個人のもっている場合もあります。漁業権も、もともとは、その漁場で漁をする人たちの共同のものであり、その人たちの生活を守り、他の人たち

とひやみに争わないためのものであつたのです。

漁場のことをやかましくいうと、とれる魚の量にもきりがありますから、元氣のある人たちは、もつと広い自由な海に出ていつて魚をとろうとします。またそればかりでなく、いろいろな原因で漁業のきぼが大きくなり、船も発達してくると、自然遠く出ていくことになります。しかしそのためには、食物や水をつんでいつたり、とれた魚をいれてくる場所があるような大きな船ができなければなりません。そこでだんだん大きな船がつくられ、帆を使つたり、大きなろを使つたりして、遠くの海に出かけるようになりました。勇敢な人々が十人十五人と組をつくり、ときにはいく組かの船がつれだつてかつおやまぐろをおいかけます。このような漁のやりかたが遠洋漁業とよばれています。この附近の漁師たちも、かなり昔から遠く金華山沖や八丈島の方まで出かけています。現在では発動機船ができましたから、ますます遠くまで出かけることができます。もつとも戦争からこのかた、油が十分に手にはいらなくなつたのと、発動機船もへつたのと、だいぶおとろえました。しかし、まただんだんとさかんになつてくることでしょう。

このような遠洋漁業は、今も昔も大きな冒険です。どうして冒険なのかわかりますか。第一に、昔は、大きいとはいっても多くは木造の漁船で、ラジオもなしに、十人内外のものが広い海に出ていったのですから、いつしけにあつて船がひつくりかえるかわからないし、どこまで流されてしまいかもわからなかつたのです。今では小さな船でも、羅針盤はもとより、ラジオさえありますし、少し大きくなれば無線電信の装置をもつていて、近くの船や陸上とれんらくし、天気ぐあいを知つたり、位置を知つたり、危険を知らせたりできます。したがつて、昔とくらべればはるかに安全になりましたが、それでも機械が故障したり、天氣の急な変化にあつたりして、これをさけられないこともあるので、やはり冒険であることはかわりません。しかし遠洋漁業が冒険だというわけは、もう一つあります。それは、そんなに苦勞してはるばる出かけていっても、必ずしも思うように魚がとれないことがあるのです。もちろん、ときには不漁の場合があるのは当然ですが、遠洋漁業では漁が大じかけですから、そのあたりはずれはきわめて大きくなえいきょうをあたるわけです。これも漁業に関する知識が増し、技術が進歩するに

つれて、だんだん不漁の場合をさけることができるようにはなりましたが、やはり程度の差にしかすぎません。



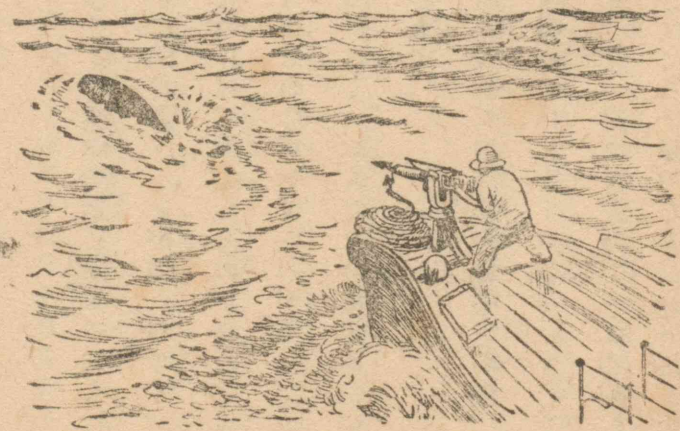
こういつた冒険をしてまで遠洋漁業に従事する人たちは、とくにおたがいに助けあうことが強いのです。海上での災難を防ぐためには、乗組のものがほんとうに氣をそろえて、自分自分の仕事をするのが第一だからです。遠洋漁業に出かけている人たちの家族もたがいに助けあつて生活します。

船主の家では、乗組の人たちの家族の食糧その他、入用のことについて親切にせわします。そういうしくみになっていればこそ、遠い海でも家のことは心配しないうで十分働けるのです。遠洋漁業から帰つてきて、とれた魚を賣つてえたおかねもなかよく分けます。いくつかの船が組になっているときは、えものの多い船や少ない船が

あつても、おたがいに平均して収入を分けあうようにします。これも、助けあいの方で不漁の損害を少なくする方法です。みんなでえたおかねの一部を、共同の資金としてとっておく所もあります。こういった助けあいは船主や網元が中心になつてゐるものが多かつたのですが、近ごろはだんだんと組合が中心になつてやるのも出てきました。

遠洋漁業がとくに大じかけとなつたものとしては、蟹工船や捕鯨船があります。これらは何百トン、何千トンという大きな汽船で、たくさん乗組員をのせ、船内には漁獲物を処理する工場がついてゐます。母艦のほかに数隻または十数隻の子船をひきつれて、あるいは北洋にあるいは南極洋にまで出かけていきます。

漁業はわが國の重要な産業ですが、これからも十分に研究を重ねて、漁業に従事する



人たちがかく助けあい、また他の職業の人たちともつと力をあわせるようにしていかなければ、こんごの大きな発達はのぞめません。たとえば石油が十分になれば、漁船の活動は思うようになりません。また、漁獲物の輸送や加工の方法をもつとくふうしなければ、新鮮な魚を國內に配給することも、輸出品としての干した魚類やかんづめのよい製品をつくることも、うまくいかなくなります。また昔からのしきたりにばかりたよつてゐるふうをなおさなければ、漁業に従事する人たちのもつ相互扶助の美風もいきづまつてしまいます。この村には漁業をいとなんでゐる家がありませんが、しかし村の出身の人には、町にいつて漁業に従事してゐる人もあり、町の水産会社に資本を出してゐる人もあります。きみたちのなかからも、將來この方面に進んで、水産日本のためにつくしてくれる人があることと思ひます。たとえ、だれもその方面に進まないとしても、きみたちが漁業に従事してゐる人たちの仕事をほんとうによく理解し、その人たちのために、きみたちのできるだけのことをすれば、それで十分役立つことになるのです。

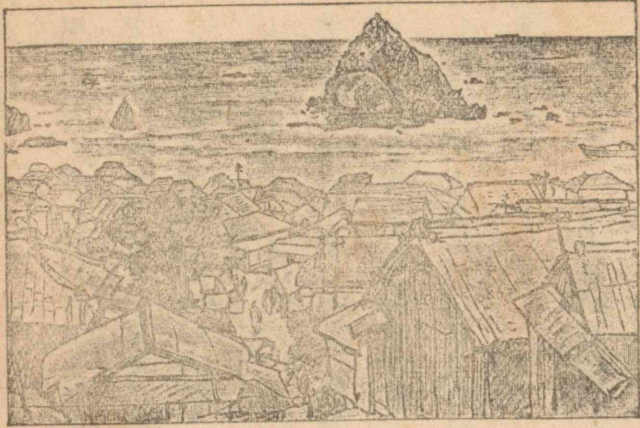
こんどきみたちが、この「さまざまの協力」という本をつくらうときめ、先生にも第四

ばんの人たちといっしょに漁業に従事する人々の協力のことを書くように頼んでくれたのは、ほんとうにうれしいことでした。漁業とこれを中心とする漁村の生活についてはおもしろいことがあまりたくさんあつて、どんなふうに書いたらよいか、先生も困つてしまいました。漁業の進歩したのは、名も知られない私たちの祖先の長い間のたゆまないくふうや発見のおかげであり、また人々の協力のたまものであることを十分に考えてください。そしてまた今後の漁業の進歩や、漁村の人々、ひいては私たち全体の生活の向上もまた、みんなのたゆまなくふうや発見と協力によるものであることを考えてください。

漁業部落の見学

第四 ばん

私たちはこのあいだの日曜日、みんなで磯村へいきました。磯村はとなり町の漁業部落です。となり町のにぎやかな通りをすぎると橋があります。橋の上までくると石油の臭がふんとしてきます。下手を見ると、発動機船が五、六ばいとまっています。橋をわたつてしばらくいくと、両がわの家のようにすがかわつてきて、とこ屋やふる屋や飲食店



漁業部落の風景

が、小さな家に入りまじつているのが目立ちます。川岸の方に漁業会の建物や倉庫があります。倉庫のむこうにいわしをにる小屋があり、そのそばにいわしがたくさんほしてありました。道がちよつとのぼりになった所の右がわにお寺があります。そこをすぎると、急にひろびろした太平洋が見えてきました。道も急にせまくなり、前よりもつと小さな草ぶきの家が、海岸までびつしりと立ちならんでいます。弁天島をはじめ、いくつもの島や岩が見えて、たいそうよい景色です。家はわりあい小さくて庭がありません。道のふちなどに少しえんどうやとうもろこしがうえてありますが、畑もほとんどありません。ひらいた魚が、あちらこちらにほしてあります。子どもたちは、みな砂浜に出て遊んでいます。もうおよいでいる子どもたちが何人も

いました。

男の人たちのすがたはあまり見かけることができません。年とつた人が二、三人、砂浜で網をつくらせていました。女の人たちは、せんとくをしたり、炊事をしたり、いそでのりをとったりしていました。せんとくや炊事を、井戸ではなく、共同の水道でやっていたのには感心しました。

井上君とはる子さんとは、漁業会の事務所（事務所）で、ぼくたちのもつていった質問に答えていただきました。あとのものは、あたりの景色や、部落の家や舟や網などの写生をしました。べんとうはみんな海べでたべました。それから、いそで海藻や貝を採集（採集）して帰りました。

まぐろ延縄の話

第四 ばん

漁業会の事務所で、かつお漁業の一例としてまぐろ延縄の話をききました。

まぐろにはビンナガ・キハダ・クロマグロ・メバチの四種があり、ふつうカジキもそのなかまにいられています。まぐろ延縄には大縄・中縄・小縄の三種があり、大縄はクロマグロ、中縄はキハダ・メバチ・ビンナガ、小縄はビンナガをとるのに用います。クロマグロは、ただマグロともいい、二三十貫のものがふつうですが、大きいのは百貫もあるそうです。岸の近くでは、だいぼう網、落し網でもとりますが、将来重要なのは、遠洋漁業の中の延縄によるものです。

延縄（大縄）の一鉢は、次のようなものからできています。

みき縄（みき） はんさんあさの縄、直径二分五厘、長さ百六十尋。

えだ縄（えだ） みき縄とは同じもの、十五尋から二十尋のもの二本、四尋のもの四本、合計六本を、みき縄百六十尋の間につける。おのおののえだ縄には、麻（あ）のしんに綿糸を巻いたもの（長さ三尋）をつけ、それにまたはりがね（二十五番線）を九本よつたもの（長さ二尋半）をつけてつりばりをつける。

つりばり 直径一分五厘から一分八厘、長さ三寸五分から四寸二分の鉄でつくる。

うき 直径三寸、長さ三尺ぐらいの桐丸太を、みき縄一鉢について二つつける。

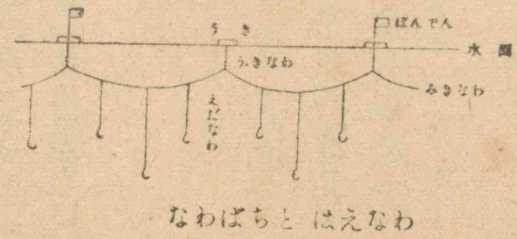
ぼんでん 長さ十五尺ぐらいの竹の先に小旗（小旗）をつけたためじりしで、みき縄一鉢につき一本ずつ、うきにつけて水上にまっすぐ立てる。

繩鉢一鉢（百六十等）ずつをいれておく竹のかごで、直径二尺高さ一尺ぐらゐある。

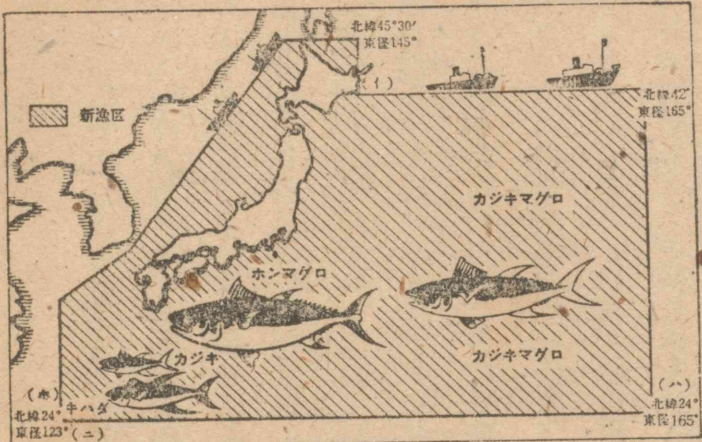
延縄は、秋から翌年の春にかけて、西風のはげしい季節に使われます。だからその船もとくにじょうぶにつくり、百トンから百二十トンぐらゐで、二百から二百五十馬力のディーゼル機関をすえつけたものが多く、延縄捲揚機、探照燈をそなえ、無線電電話機、漁獲物貯蔵の設備などもあります。

漁船の基地では、いつでも、漁場の状況や天候についての情報を集めています。そしていよいよ漁に出かけるときは、船や機関に故障がないかどうかをしらべ、漁具やえさや燃料、氷、食料、飲料水などをつみこんで、けんとうをつけた漁場にむかって出発します。一航海は一月以上におよぶことがあります。

漁場が近くなると、見張りのものは少しのゆだんもなく海上をみはって、他の船の行



動はもちろん、海鳥の集まりかた、潮流や水温などに注意します。そしてためしにはりをおろしてみたりして、魚群がいるかどうかをしらべながら航海していきます。いよいよ漁場に到着しますと、船長の命令で乗組のものはそれぞれ持ち場につき、延縄にうきやぼんでんをつけ、船の速力をかげんしながら、縄を海に投げます。五、六十トンの船でも百鉢、百五、六十トンの船だと二百鉢から三百鉢をつないで投げこむので、縄の全長は二十海里以上になります。えさはスルメイカ、ヤリイカ・ムロ・イワシなどです。このようにして、間を通るクロマグロをまちぶせるわけです。



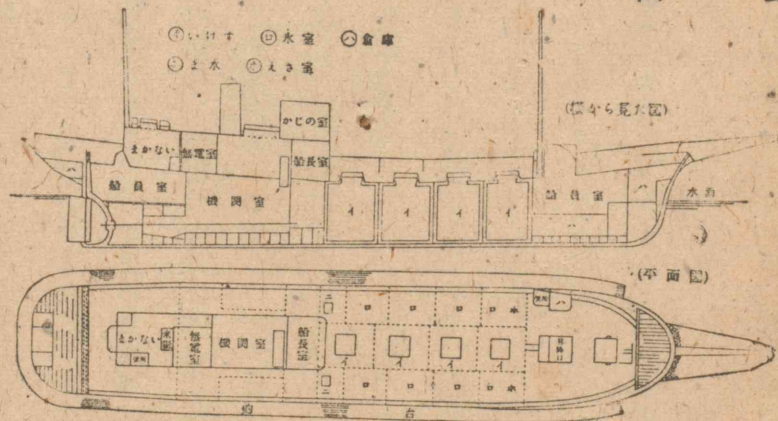
わが國の漁区とまぐろの漁場

縄を入れて適当な時間がたったら、縄の一方のはしから引きあげていき、鉢を整理し

ます。そして、とれた魚を処理して貯蔵し、次の行動にうつります。

マグロは日本人には親しみの深い魚ですが、沖に出るとなるようになったのは明治以後です。それも明治の中ごろまでは、小さな和船で、しかも帆をかけて漁に出たので、せいぜい岸から二、三十海里、一航海二、三晝夜にかざられていました。しかも冬の海のあらい時に漁をするため、遭難する船が多かったのです。

それが明治のおわりごろ、発動機のある漁船がふえてから、もつと沖に出ていくようになり、漁船の数もふえました。さらに航海や漁の技術が進歩し、船も改良され、延縄などが使われるようになり、また船内に冷蔵の設備ができたり、無線電信が利用されるように



マグロの漁船

なつてからは、いよいよ遠方に出るようになったのです。東は太平洋上二千海里、南は赤道以南まで出かけていったこともあります。ことに冷凍にしたり、かんずめにしたものが海外に輸出されるようになって、このまぐろの漁業は非常に発展しました。今後も、捕鯨やトロール漁業、かつお漁業などとならんで、さかんにしなければならぬものです。

次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょう。

- 1、 「さまざまの協力」の他の部分はどうなふうにできたか、考えてみることに。
- 2、 現代の農業はどんなにして発達してきたかをしらべること。
- 3、 家畜のはたらきや飼いかたや、その歴史についてしらべること。
- 4、 農業と鉱業や工業との関係についてしらべること。
- 5、 農はん期の共同炊事やたく見所のことをしらべること。
- 6、 肥料その他の入用な品物の配給のみちすじをしらべること、昔と今との手に入れかたをくらべることに。
- 7、 衣食住について大昔と今とをくらべてみることに。
- 8、 現在の水産業はどんなにして発達してきたかをしらべること。

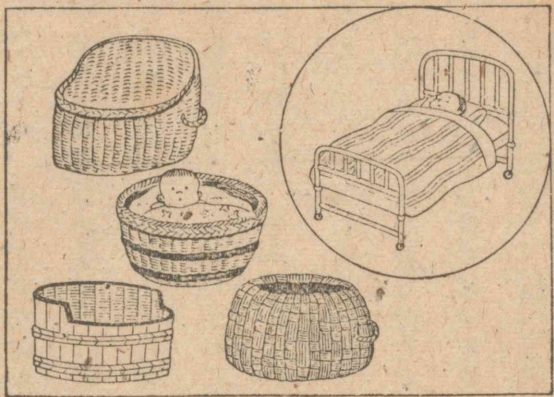
- 9、いろいろな製塩法をしらべてみる。
- 10、漁業部落を見学して、衣食住のすべてについて、農業部落とくらべてみて、なせちがつてい
るかを考えてみる。
- 11、さまざまの土地の利用のしかたをしらべてみる。裏作のことや漁村の菜園や土地の使い
かたを考えてみる。
- 12、物の生産に關係して、交通がどんなに發達してきたかをしらべてみる。
- 13、町の商店をしらべ、賣る品物、店の位置、店の数などを地図にあらわす。

四、誕 生 日

きょうは、くに子さんのお誕生日です。三郎君はもちろん、進君、すみ子さん、はる
子さんの新聞係の委員は、お祝いの夕食によばれました。

くに子さんのおとうさんは、くに子さんが三つのときに、またおかあさんも五つのと
きになりました。それに戦争中はおにいさんが兵隊にいったので、ずいぶんさびし
かったのです。小さいにいさんとふたりでるすをしていました。ちやうど東京におよめ
にいつていたおねえさんの一家が疎開してきて、いろいろせわをしてくださったのでし
たが、それでもなかなかたいへんでした。しかし戦争がおわつて、おにいさんがお歸り
になると、まもなくおよめさんがこられて新しいおねえさんができましたし、今まで人
のおせわになっていた田や畑もまたうちの手にかえて、急ににぎやかになりました。
おにいさんは高等科しか出ていられませんが、酒もたばこのまれず、おとろえてし
まった家運をとりかえそうといっしょうけんめいに働いていられます。おねえさんは町

の女学校を卒業されましたが、毎日まっ黒になつてのら仕事をしていられます。去年赤ちゃんが生れました。



めづえとベッド

おにいさんもおねえさんも、たいへん進んだ考えをもつていて、農家の生活を明かるくしようとしていていられます。ひとつには、にいさんのるすちゅうさびしかつた、くに子さんや小さいにいさんの心を、ひき立ててくださるおつもりもあるようです。このへんでは、子どもの誕生祝いに、そのお友だちをよぶというようなことはありませんが、おねえさんたちのお考えで、新聞の係の人をよんでくださったのです。くにさんが新聞の係になつてから、

たいそう元氣が出てきて、いつも夕飯のときなど、その話をするので、おにいさんたちもおねえさんも、興味をもつてなにかとちえをかしてくださつたりします。また新聞のなかまの人たちのことなども、いろいろと話にきかれて、たいそうよろこんでいられるので、きょうもその人たちをよんでくださったわけです。もつとも三郎君は家が近いので、しじゅういきさしています。

きょうは日曜なので、くにさんは朝からおねえさんのお手つたいです。赤ちゃんは奥座敷のおにいさん手製のベッドにねていて、たいして手がかかりませんが、おねえさんのお料理はずいぶん念入りなので、朝からたいそういそがしいのです。

約束の五時になると、三郎君をはじめ、そろつてやってきました。したくがまだできないので、女の子はみなでお手つたいです。座敷に食卓をならべたり、それをふいたり、かびんにダリアをさしたり、座ぶとんを出したり、かいぶしをたいたり、おねえさんのさしずどおりにやりました。くにさんはお台所の方もお手つたいしています。三郎君と進君とは、えんがわに腰をかけて何か話しています。

にいさんと小さいにいさんが、早めにのらから帰つてこられました。みんなを見て、「おやおや、お客さんに働かせて。」と笑いながらあいさつなさいました。

食卓の用意ができたときには、おにいさんたちも、おふろをすませて出ていらつしやいました。座敷に食卓を二つならべて、八人がぐるりとすわりました。まんなかのかびんには赤いダリアがさしてあつて、見た目にもぎやかです。おいしそうな五目^{ごもく}ごはんが、めいめいのおさらにもきれいに盛りあげてあります。すい物のおわんも、お魚のおさらも、ひとりひとりそろえてあります。新鮮なきのうりとトマトは、二つの大ざらにもつてあります。そのそばにけ黄いろいどろどろしたものがこばちにいれてあります。一同で、くに子さんにおめでとうをいいました。くに子さんも、うれしそうに、ありがとうございます、と答えました。

三郎君は五目ごはんからたべようと思つて、すみ子さんの方を見ましたら、すみ子さんはおすい物のわんを取りあげたところです。ああ、そうそうと思つて、三郎君もおすい物をいただきました。ねぎと小さなおだんごがはいつていました。なんとなくあま味があつておいしいおつゆでした。おだんごはちよつとかまぼこのような味がしました。三郎君が何でつくつたのかしらと思つていみると、おねえさんが笑いながら、「三郎さ

ん、それ、何だか知つていて？」といわれたのでびっくりしました。いわしでつくつたものどときいて、もう一度びっくりしました。三郎君は、いわしというものはあまりおいしくない、とばかり思つていたからです。「ええ、いわしですか。」というとき、三郎君がいわしをあまりすかないことを知つているおねえさんは、「その焼きたてのいわしをたべてみてくださいよ。」といわれました。頭も骨もとつて、身をひらいてつけ焼きにしたそのいわしは、おいしそうな香^{かほ}がしています。一つとつてたべると、かば焼きのよいうな味がしてたへんおいしいのです。めざしやたいこんとにつけたいわしになれていたら三郎君は、いわしのおいしさを知るよいおりにぶつかつたわけです。おねえさんは、「そのいわしはけさ町から賣りにきたのを買ったのですが、あとはみんな家でつくつたものや、前からとつておいたものだけです。ああ、そうそう、三郎さんのうちからいただいたものや、配給のものもあります。」といわれました。五目ごはんには、にんじん・ごぼう・いんげんのほかに、いもがらや、しいたけがはいつていて、のりがかけてありました。おにいさんは、「なかなかよくできたじゃないか。」と笑いながら、たべ

ていられます。「三郎君たちおかわりをしなさいよ。」といつてくださいましたので、三郎君と進君は、五目ごはんを軽くかえてもらいました。すみ子さんたちは、もう野菜をいただいています。五目ごはんのおさらに、トマトやきゅうりをのせて、黄いろいものをかけておいしそうにたべています。三郎君は先ほどから、その黄いろいものが何だかふしぎでしかたがないのです。はる子さんもめずらしいような顔をしています。三郎君もトマトやきゅうりはたべていますが、その黄いろいものだけは見なれません。ちよつとたべてみると、野菜サラダと同じような、すばらしくおいしい味がします。うかがうと、家の落花生でつくった落花生油や、卵の黄味や、酢からできているマヨネーズというのだそうです。トマトやきゅうりも、いつもとちがった味がして、たいへんおいしくいただけました。

だれもがきれいにごちそうをたべてしまったので、あとかたづけも手がります。食器類はたちまちのうちにさげてしまいました。そしてお茶をいただきながら、おねえさんたちと話しました。おねえさんは赤ちゃんにお乳をのませながら、きょうのお料理の話

をしてくださいました。にisanふたりは台所で話しながら、火をもしていられれます。

姉「くにちゃんのお誕生日は、ずいぶんいい時ね。畑にはいろいろな野菜があるし、海でもいろんな魚がとれるから、お料理をつくるのもちくたわ。」

くに子「でもきょうは、おねえさん、たいへんだつたでしょう。」

姉「いいえ、いそがしいだけで、材料に苦労しないからたいそうらくなのよ。」

はる子「あんなにいろいろのものが使つてあつたけれど、みんなとつておいたのですか。」

姉「家では、ふだん、材料をあまり使わずに、物日やみんなの誕生日や、お客様のならつしやつた時の用意にとつておくのですよ。」

進「だれの誕生日がいちばんわるいでしょうか。」

姉「さあ、材料にいちばん困るのは、四月ごろかもしれないね。いけておいただいこんやにんじんやごぼうももうなくなっていますし、お葉類も花が咲いてしまふし、春まいたものはまだ使えないし、お魚でも配給されなかつたらほんとうにしかたがありません。どこの家でも、そういう時のために、干し魚や、つけ物や、切りぼしや、こ

んぶや、いろいろの食糧を貯蔵しておきます。だから、そういう時のごちそうは、今ごろのとはよほどよすがちがいます。」

すみ子「東京などでは、このごろでも、なかなか野菜や魚が手にはいらなくて困るそうです。それでどの家でも、貯蔵できる食物はなるべく少しずつ使つてながくもたせるようにしている、とおとうさんがいつていました。」

姉「ほんとにねえ。ここの東京のおねえさんなども、ずいぶん苦勞していらつしやるよです。輸送や配給が思うようにいかないからですが、困つたことです。それを思うと、このへんはまつたくありがたいことです。」

進「船でも野菜や魚には、ずいぶん不自由するといひます。」

三郎「しかし、大きな船には冷蔵庫があつて、たくさん野菜や魚や肉を積みこんでいる上に、かんづめを使うので、なかなかごちそうがつかれるという話だよ。」

すみ子「船ではどうしてもたいくつするので、旅客をなぐさめるためによいごちそうをつくるのだときいたことがあります。」

姉「いなかの生活もすっかりすると変化にとほしくなつて、楽しみが少なくなりますます、みんなでくふうをしあつてごちそうをつくつたり、それを近所に分けたりするのは、たいせつなことだと思ひます。しかしいなかの生活は非常にいそがしくて、なかなかお料理をつくるひまがないのがふつうです。だから家じゅうのものが力をあわせて、ひまをつくることだがいじなのです。」

すみ子「おとうさんのお話では、いなかの人たちは、食事の量が多いわりに種類にくふうが少ないので、子どもなども案外に抵抗力が弱いことがあるといふことです。それでもこの村などは海岸に近いので、しぜん、魚をたべることが多いのでよいそうです。ただ時々、肉はすきでも魚はきらいという子があつたり、病氣になつても牛乳をのまない子があつたりするのは、困つたことだといひました。」

姉「だから、いなかではお料理にくふうをすることがたいせつなのです。それといひしよに、みんながなるべくすききらいをいわないで、じょうになる食物を研究してたべることが必要なのです。しかし、昔とくらべるとたいへん進歩してきたものです。疎

開してきた町の人たちから、教えていただいたことも多いと思います。」

進「さつきいわれたひまをつくるのには、どうすればよいのでしょうか。家のおかあさんなど、朝から晩まで、せわしくてせわしくてしかたがないといっています。」

姉「上田さんのお家は、人数が多いし、お家も広いから、食事のことも、せんとくでもそうじでも、ずいぶんたいへんなのですね。ましてお年寄もいらつしゃいますから、いろいろ御用事が多くなるでしょう。上田さんが、おそうじをしてあげたり、着物をよごしたりやぶったりしないようにすれば、それだけおかあさんの手があくわけでしょう。上田さんのおねえさんも、妹さんも、弟さんも、みんながそろってそういうふうにすれば、おかあさんが時にはごちそうをおつくりになるひまもできるといふのです。しかし私たちの生活にひまをつくるのは、なかなかの大事業です。おや、おにいさんが呼んでいらつしゃいますから……」

おねえさんとかわつて、ふたりのおにいさんが話のなかまにおはいりになりました。

兄「みんな、なかなかおもしろそうな話をしていたね。ひまをつくつてどうしようとい

うのかい。」

進「おかあさんにごちそうをつくつてもらうのです。」

兄「ハハ、それもいいね。だが、ひまの入用なわけはほかにもあるよ。」

はる子「お裁縫をしたり、ラジオをきいたり……」

兄「そう、そういうこともあるね。ひまはまずく使うと、人間をだめにしてしまうが、

また仕事にばかり追われていてひまをつくらないと、自分のしてきたことを考えてみたり、これからの計画を立てたりすることができないばかりか、だんだんと考えのせまい、かたよつた人間になつてしまふだろう。そして自分の家や自分の村、ひいては自分たちの國や世の中をよくしていくくふうや仕事もできなくなつてしまふのだ。ではひまをつくるためのくふうはというと、ずいぶんたくさんあるよ。にいさんのような百姓仕事でも、第一に計画をきちんと立てること、そして仕事におくれないこと、第二に仕事のやりかたをくふうすること、ことに農具や農業機械、それに家畜の力をうまく利用すること、第三に家じゅうのものが心をあわせて働くこと、第四に

は組合から肥料をもらつたり、生産した物を送り出したりする仕事ですらすらといくことなど、どれもみなたいせつだ。おねえさんの仕事にしても、一日じゆうの仕事がくるいなくはかどること、家じゆうのものが氣をそろえて、いつしよに起きたり、食事をしたり、そうじをしたり、入浴したりすること、食糧その他の配給が規則的にすらすらはこぶことが非常にたいせつなのだ。しかしこのごろでは、配給はなかなか手数がかかるし、女の仕事は天氣やお客様のつごうでくるうことが多いので、むやみにいそがしくなってくる。家ではみながみな氣をそろえてくらすことができるので、その点はいいが、それでも赤ちゃんのことはいつてきただけ、ねえさんのひまが少なくなつてきている。ましてふつうの家では、年よりや子ども、学校にいく生徒たちのつごうで御飯が二度になつたり、そうじが一度にやれなかつたりするので、家などとは比較にならないほど仕事のでまがかかっている。だから、今いったようなことに氣をくばるほかに、仕事のしかたにいろいろなくふうをすることや、家の設備を能率的にする必要が大いにあるのだ。すみ子さんのお家など、りつばなお手本だと思つてい

る。家でも台所の窓を大きくしたり、水がめの場所をかえたり、流しを廣くしたり、かまどを土間からあげて流しに近くしたりして、勝手仕事も明かるく衛生的で、能率のあがるようにくふうをしているわけだ。赤ん坊をあんな妙なベッドに入れておくのも、一つはなるべく手のかからない子どもに育てるためだが、また一つには衛生を考えた点もあるのだよ。

ぼくたちの祖先も、たしかにいろいろとくふうをしてきている。たとえば、お祭や物日のきめかた、その時のごちそう、季節季節の料理、村のいろいろなしきたり、火災や不時の災難の予防法、家の構造や屋敷のかまえ、また赤ん坊の育てかたなどに生活によくあう苦心がはらわれている。しかし時代が進むにつれて、いなかの生活も昔とはずつとかわつてきて、昔の人のくふうもはじめの精神が失われ、ただ古い習慣となつてしまつたものが少なくなる。迷信や偏見とむすびついて、かえつて害をおよぼしているようなものさえある。とくにわるい方の例ではないが、家のへやの使いかたでも客間をいちばんよい所にして、一家のものがね起きる所は日のあたらぬいへや

にしてみたり、土地によつては晝間もね床をしきはなしの所があつたり、保健とか衛生の面からいうとずいぶん無考えのことがある。昔からのよい風習（ふうしゅう）はほとんどこわれていくのに、かえつて悪いしきたりがはばをきかせていることが多いのだ。

村の生活をもつと明かるい力強いものにしていくということは、なかなか容易ではない。今いつたような、昔からのしきたりの勢力が強い上に、土地の自然のもつていゝる力もなかなか強い。土地の産物や産業は自然との関係であまりかわつていけないから、生活も思うように進歩していかないということになりがちだ。寒い地方とか、山の地方とかでは、とくにそういうことがいえると思う。この村などは自然にめぐまれていていいのだが、それでも東京との交通は不便なほうだし、水道や電気などは、よほどくふうしなければうまくいかない。むずかしいからぎりぎりまで見あわせておこうということになってしまう。となりの磯村には水道があるのに、この村にないのは、きみたちもふしぎに思つたことだろう。」

おにいさんはなかなか話に熱がはいつて、それからそれへと話しつづけられました

が、さすがに新聞の係だけあつて、みんないつしぼうけんめいにきき入っていました。この時おねえさんが台所から出てきて、おにいさんをよばれたので、しばらく話がとぎれました。

まもなくおにいさんたちは、大きなおさらにおまんじゅうを山のようにもりあげてはこんでいらつしゃいました。

姉「これは、おにいさんがみなさんにこちそうしようというので、きのうの朝から用意してつくつたシナまんじゅうです。なかには何もはいつていませんから、このクリームをつけておあがりなさい。こちらの野菜といつしよにたべてもおいしいかもしれませんよ。」

はる子さんは、このおまんじゅうがふつうのおまんじゅうやパンとちがつて、たいそうふうわりとできているのをふしぎに思いました。クリームはあまくておいしいし、たまなと香じその塩もみも、あつさりしておいしいので、たくさんいただきました。

兄「これは、つくるのに少してまがかかるけれども、なかなかかわつてゐるだろう。に

いさんが中國の人からならつてきたんだよ。じゅうそうがほんの少しいるだけで、ふくらし粉やじゅうそうでふくらませたんじやないよ。たくさんたべてもらおうと思って、このとおりどつきりつくつたから、えんりよなくおあがり。」

はる子さんやすみさんは、おねえさんからこのおまんじゅうやクリームづくりかたを教えていただきました。

それからあとはみんなでいろいろな遊びをして、おいとましたのは九時近くでした。ちやうど明かるい月がのぼつてきて、白い砂の上にくつきりとまつ影がうつつて、美しい夜でした。

次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょう。

- 1、農家で客をよぶのはどんなときかしらべてみることに。
- 2、みんなの誕生日のお祝いのしかたをくらべてみることに。
- 3、学級で誕生会をもよおすことに。
- 4、來客用のふとんや道具類をしらべ、その扱いかた、保存のしかたをしらべること。

- 5、必要な栄養素をしらべ、こんだて表をつくつてみることに。
- 6、あるきまつた日につくる特別の食物について、一年じゅうの表をつくつてみることに。
- 7、さまざまの食物の貯藏法と、その發達の歴史をしらべてみることに。
- 8、自分の家を住みよいものにするくふうを考えてみることに。
- 9、自分たちの生活のしきたりで不便だと思ふこと、わるいと思ふことを、他の人と話しあつてたしかめてみることに。
- 10、自分の住んでいる土地の自然が、どのくらい自分たちの衣食住にえいきょうをあたえているか、考えてみることに。
- 11、ひまをつくることについてくふうをすること。
- 12、家の人たちにひまをつくつてあげるように努力し、それがどんなふうにかの役人たちの役に立つかしらべてみることに。
- 13、みんなできつしよにできる遊びをくふうすること。

五、夏休みの計画

七月になって急にあつくなりました。お祭りや遠足、田うえなど、楽しみの多かった一学期もそろそろおわりです。松林のむこうから吹いてくる海風が、なんとなく楽しい心をさそうような気がします。十日からは、午後の授業がなくなりました。きのうの午後、三郎君の学級では、夏休みちゅうの生活を中心にして自治会がひらかれ、次のようなことがきまりました。

- 一、できるだけ家の手つだいをする事。
- 二、水およぎは必ず二、三人いっしょに、危険のない場所をえらんですること。
- 三、毎朝、涼しいうちに自分のすきな勉強をすること。
- 四、学級の農園の手入れは、各はん交代こうたいですること。
- 五、自分の家の役に立つような道具や設備をつくること。(家の人から頼まれないものでも、役に立つものを考える。)

六、自分の家の職業についてくわしくしらべること。

七、村の問題について、考えをまとめておくこと。

八、旅行をする人は、なるべく写生をしたり、絵はがきや標本を集めたりしてすること。

六番と七番については、だいぶ意見が出たのですが、学期のはじめにきめた学級の標語に照らして、できるだけやつた結果をまとめ、本にしてみようということになりました。農業をやっている家が多いので、その家の人たちは、自分の家の特別な作物や副業についてしらべてもよいこと、また何人か組んでやつてもよいことにきまりました。七番は六番を研究した結果、必要を感じた人たちだけでよいことになり、五番の結果は学級新聞に発表することになりました。学級新聞は十日ごとに発行する予定です。

進君の家は、部落の中でもいちばん手びろく農業をやっていて、米も麦もさつまいもも野菜もつくっていますが、それらはどれも他の家と同じなので、進君は種まゆの製造のことをしらべることになりました。進君の家では長野縣の会社ととりきめをして、春、種まゆをつくるのです。村にはほかにも種まゆをつくる家がありますが、みな進君の家

でまことの世話をしているのです。

養蚕はわが國の將來のためにきわめて重要な産業です。戦争中、アメリカではナイロンという人造せんいができて絹の競争相手になり、現在でもくつ下などでは絹の方がおされているようですが、食糧や石油、木材等の見返り物資として、生糸や絹はいちばんだいなものです。その生糸の原料となるまゆは、全国各地の農家でつくられています。

養蚕はわが國の農家でもっとも廣く行われているだいな副業です。ことに山の地方では、副業というより、むしろ主要な仕事になっています。賣るほど米や麦がとれる農家や、畑作物を賣つて金にかえることのできる農家はよいのですが、自分の家でたべるだけの穀類や野菜しかつくる土地をもたないわが國の多くの農家、ことに山の地方の農家では、養蚕とか炭焼きとかはたいせつな現金の道になります。戦争以來ようすがかわつてきましたが、現金をとるためには、養蚕や炭焼きなどの副業にたよるほかのない家も多かつたのです。そのうちでも養蚕は、わが國では昔から、どうしても農家と切りはなせないものでした。

よい生糸を多くとるには、よい蚕の種をえらぶことが第一です。だからその種紙をつくるのは非常にたいせつな仕事です。研究が進むにつれて、種をとる蚕は、まゆをとる蚕とは別にして、特別に飼つた方がよいことがわかり、そのためとくにそれに適した土地をえらんでやるようになりました。進君のおとうさんは、このあたりの氣候が溫暖なのと、村に山くわの豊富なこと、きょうそなどという蚕の敵の少ないことなどを考えた上で、長野縣の会社と相談して、十数年前からこの種まゆの製造をこころみられたのです。はたして進君のおとうさんのお考え通り、よい種まゆがとれるので、現在では縣下はもちろんのこと、長野・群馬、その他の養蚕地方から頼まれて種まゆをつくるようになりました。進君はおとうさんにきいて、このことをくわしくしらべようと思ひました。はる子さんは養鶏のことを、すみ子さんは医者のことを、くに子さんは、野菜の促成さいばいのことをしらべるそうです。三郎君も乳牛飼育の副業のことを研究するといつています。

進君の手つたいは、畑の草とりです。ことしはおとうさんをびつくりさせようと意氣

こんでいます。三郎君は毎日の牛乳運ばんのほかに、牛にやる草刈りをするつもりです。もちろん畑の草とりもします。はる子さんも進君と同じですが、台所のお手つだいもしたいといっています。すみ子さんは進君を手つだつて、草とりをするそうです。くに子さんは草とりもしますが、赤ちゃんの着物をぬわしてもらえると楽しみにしています。それから、せんだくも手つだうといっています。

村の問題については、三郎君と進君は相談の結果、まず上の山のに皆さんの所へいつて、話をきくことにしました。上の山のにさんは、町の銀行に勤めていられるので、三郎君からつごうをきいておたずねすることにしました。

夏休みにはいつてさいしょの土曜日の午后です。三郎君と進君とは、上の山のにさんの家をおたずねしました。にさんは銀行から帰つて、ひといき入れられたところでした。

兄「村の問題をしらべらつて、どういうわけなのかい。」

三郎「ぼくたちは、この夏休みに、自分の家の職業がどのくらい村や世の中の人の役に立っているか、またどんなに村の人々や他の職業の人たちのおかげを受けているか、それからぼくたちは家の職業にどんな手つだいができるか、ということの研究しようときめたのです。しかし、村の役に立つということは、すぐわかるようでいて、考えるとはつきりしないのです。先生は、これには村の問題ということを考えてみる必要があるといわれましたが、きょうはその村の問題とすることをうかがいたいのです。」

兄「ほう、なかなかえらいことを勉強するんだね。じゃあきくが、きみたちの知つてい

三郎「それがぼくたちにははつきりとわからないのですが、村から、はいやかやのみを追いはらうことなども問題ではないのですか。また疎開の人たちや非農家の人に野菜などを配給してあげることや、戦災者や引揚者を助けてあげることなども問題ではないのですか。食糧の供出とか肥料やじかたびなどの配給も問題なんでしょう。」

兄「なんだ、なかなかよく知つているではないか。それはみんな村の重要な問題だよ。」

つまり、村の人たち全部が、なかよく助けあって、少しでもよい生活のできるようにしていききたいと思うとき、そのじゃまになること、たとえば、はいやかがいて傳染病をひろげるとか、農家では不自由ないばかりか、遠くの土地まで野菜を賣り出したりするのには、非農家や疎開の人たちが野菜に困るとか、供出のわりあてが公平にいかないとか、非常に困っている家にじかたびがあたらないとか、そういつた困ったことがらをどう解決すればいいかというところに、村の問題があるというわけだ。」

進「小作の人たちに土地を分ける問題や、村に工場をつくる問題、副業をさかんにする問題などもあるように書いていますが……」

見「そうだ。それらの問題は、困ったことがらを解決するためというよりは一步進んで、村全体がなかよくして少しでもみんなの生活をよくしていくために、こうしたらどうかと考えるときにおこつてくる問題なのだ。たとえば、なるべく小作の人を自作にかえることとか、食料品に加工する工場や、その他の工場をつくつて新しい産業をおこすこととか、副業として養蚕をさかんにしたり、にわとりとかぶたとか乳牛とかを飼

うこととか、そういうのぞましいことをじつさいにやるためにはどうすればいいかということもまた、村のたいせつな問題になつてくる。」

三郎「つまり、村全体の生活をよくするのにさまざまになつていて、ことをとりのぞいたり、つごうのよいことをはじめていこうとしたりするところに、村の問題があるわけなのですね。」

見「そうだ。だから、きみたちが家業のことをしらべていつて、村としてはこうでないと困るとか、こうした方がいいとか、そんなふうを考えることにつきあたれば、そこに村の問題が出てくることになる。たとえば、三郎君が乳牛を飼う仕事を研究していつて、乳牛を飼っている家には、飼料となるふすまや塩をもつと配給してもらわないと、村では乳牛を飼えなくなつてしまふというところがわかつたとする。そうすると、牛の飼料や塩の配給ということが、村の問題の一つになつてくるわけだ。少しむずかしくなるかもしれないが、さつき進君のいつた副業の話でも同じことだ。今は農村は景氣がよいけれども、これはそういつまでもつづかないかもしれないし、また

現在のよう^に臨時の仕事があつて、人手があらへまわつてゐるといふことも、長つづきするとはかぎらない。そうすると、どうしても將來のことを考えた上で、よく土地にあつた確実な副業をはじめておく必要がある。村としては、そこにもたいせつな問題が出てきているわけだ。」

進「そうすると、はいやかをなくすことは、それほど大きな問題ではないのですか。」

兄「そうだね。ちよつと考えると大きな問題ではないようにみえるかもしれないが、なかなかそうじゃないんだよ。村全体の人が結びあつて、もつとよい生活をしていこうとすると、今いつた職業とか経済とかの問題がまず第一に考えられはするが、みんなが健康で楽しい生活をするといふことも、やはり同じようにたいせつなのだ。むしろこの方が手つとり早い問題かもしれない。はいやかを飼つておいたつて、別に何のたしにもならないのだからね。はいのために傳染病がはやつて、おたがいにむだな費用を使つたり、いのちをうばわれたり、またかのために毎晩苦しい思いをしたりするのは、あまりほめた話ではないね。それも、はいやかはどうしてもなくせないといふな

らとにかく、みんなで心をあわせて骨を折れば、十分たじでできるのだからね。」

三郎「そのほかには、どんな問題があるでしょうか」

兄「それは、君たちがみつけるのがいいと思うが、たとえば、村の人たちの職業や経済にすぐにむすびついてくるものには、組合でトラックを買いいれる問題がある。村でできる草花や、そら豆、促成野菜を東京方面に送り出すのに、いちいちとなり町の運送業者にたのんだり、鉄道を使つたりしていたのでは、おそくもなるし利益もへるからだ。こういつた運搬や交通通信に關係した問題は、まだほかにもあるだろう。また六・三・三制の実施にもなつて、小学校や中学校の校舎をどうするかというような教育の問題もある。君たちが勉強するのに学校にもつと本があつたらいいと思ひ、それを先生がたにおねがいすれば、それも村の問題になつてくるわけだ。小さい子どもたちだつて村民の一人なんだからね。」

三郎「村の問題つて、ぼくたちにもすぐ關係があるものもあるのですね。」

兄「そうだ。君たちが、もしわるい遊びにふけつたりすれば、それも村の問題になつて

くるわけだ。村の人たちの考えかたを、もつと深みのあるものにするとか、みんなに人間のほんとうの楽しみを味わわせることとかも大きな問題だ。進君のおとうさんのおっしゃるように、村の人一人一人の収入が増したといつても、それがつまらない楽しみのためにむだに使われてしまつてはなんにもならない。ましてくらしがらくになつたということが、人にしんせつをつくすゆとりをつくるどころか、損得のことがばかりを考えようとするきつかけになつてしまふのでは、かえつてなさない。青年会でやっているいろいろな仕事も、この問題に関係しているものが多い。」

進「村の問題は、ずいぶんたくさんあるわけですね。」

兄「そして、そういった問題は、どれも、君たちのしらべようとする家業のことと、すぐ結びついているのだ。衛生のこととか、教育のこととか、楽しみを味わうこととか、人々の考えかたのこととかだつて、みなそうなのだ。」

もともと職業というものが、生活とは切つても切れないものだ。健全な生活ができなければ、どんな職業だつてりつぱにやりとおすことはできない。それに職業のうち

には、お医者さんとか役場の人とか先生がたとかのように、保健衛生や人々の心かけのことに直接かかわりのあるものもある。杉山君などは、ああして朝から晩まで、人からなんとかいわれるくらい、農業にせいを出して働いているけれど、金をためるのを目的にしているのではない。明かるい農家の生活を自分たちできずいてみようという強い熱意でいっばいなんだ。つまらない交際におかねは使わないけれど、よい本はどんどん買って読むし、青年会の費用などはずいぶん出しているんだ。いつもひまをおしんでいるようにみえるが、あれでゆつくりする時には、また思いきつて楽しそうに時間を使っている。ぼくは、そのうちきつと、ああいう生活のしかたにみんながひきつけられるようになると思つている。」

三郎「このあいだくに子さんの誕生祝いに、ぼくたちもおにいさんからおまんじゅうをこちそうになりました。」

兄「おお、そうか、それはおいしかったらう。誕生祝いにあつまるのはいいね。それでおもしろい話でもあつたかい。」

道「農村の生活をよくしていくには、自然のいろいろな條件と、昔からのわるい風習とがじゃまをする。これにうちかつには、家じゅうのものが力をあわせることと、くふうをすることとが必要だ。というような話で、ひまの入用なこと、ひまのつくりかたなど、にいさんやねえさんとみんな話しました。」

兄「それはよかった。じつさい、ぼくたちの生活のよいところはすぐくずれるくせに、わるいところはなかなかおらないのだからね。ほんとうに心をあわせて、努力する必要があるんだ。」

道「くに子さんのおにいさんも、そういつていましたよ。」

三郎「それでは村のいろいろな問題は、どうしたらいちばんうまく解決できるのでしよう。たとえば、方々の家で乳牛の飼料や塩の配給を増してもらうには……」

兄「まずその飼料や塩のことをくわしくしらべるんだね。現在この村で使っている飼料ばかりでなく、昔使っていた飼料や、他の土地で使っている飼料についてもよくしらべ、いちばん適当なもの、どうしてもなくてはいけないものを考えて、その種類や分

量をはつきりさせる。そしてそれらのいちいちについて、手に入れかた、手にはいる分量などをしらべあげる。ことにぜひ配給を心配してもらわなければならないものについては、その生産地や配給のみちすじから、その値段とか品質にいたるまでくわしくしらべなければならぬ。そして、こういうふうにするれば手にはいるという目あてがついたら、だんだんにはかの人たちにもその話をしてきかせるのだ。そうすると、はじめの考えがいろいろとたしかめられ改められて、みんなの意見がまとまるようになる。そこまできけばもうしめたものだ。それは部落の人たちの寄合いでも話にでるし、乳牛組合でも話しあわれ、さいごには、村会や村役場、農業協同組合とか、牛乳の集荷や販賣にあたって組合や業者まで動かすようになってくる。もちろんそれまでにはいろいろな困難があつて、そう急には飼料や塩が配給されるようにはならないかもしれないけれど、みんなの考えが正しく、それに力をあわせて努力しあえば、必ず問題は解決されるだろう。つまり正しい意見はしだいにみんなの意見となり、みんなの意見となれば、それはきまつて実現されてくるというわけだ。もちろんそういう正し

い意見の生まれてくるまで、またみんなの意見が一致してくるまで、それが実現されるまでのすじみちは、問題によって一様ではない。それはやつぱり、きみたちが勉強するにつれてわかってくると思う。きみたちの学級で、村の道ぶしんを手つたおうとか、展覧会をやるうとか計画する場合でも、よく考えてみると、今いつたようすじみちがひとりでできていると思う。村だつて、学級だつて、問題の出できかたも、解決される方法もまづたく同じなのだ。」

かなりこみいつたお話でしたが、三郎君たちはいつしょうけんめいにきいたので、だいたいわかりました。おにいさんはさらに、次のようにいわれました。

兄「ここでひとつ、つけ加えたいことがある。たとえばきみたちの学級に、おとうさんが御病氣で困っている一人の友だちがあるとす。みんなはむろんなんとかして、そのお友だちを助けて元氣づけたいと思うだろう。そうなればもうりつばな学級の問題だ。それを同じように、村でもある特別の家に、別にそれは貧乏で困っているというわけでもなくともいいのだが、とにかくある一けんの家やある一人のために、みんなで

何かしてあげたいということになると、やはりそれは村の問題になつてくる。たとえば村に功勞のあつた村長さんにお礼を申しあげたいとか、戦災で困っている家を助けてあげたいとかいうことは、やはり村の問題と考えていい。そのわけは、ひとつみんなに考えておいてもらいたいね。要するに村の問題といつても、何か特別のものがあるように考える必要はないんだよ。村の人たち全部の生活がもつとよくなるように、牛がよく乳を出してくれるように、作物がよくみのるように、村に病人がでないようにと考えてみて、それにはどうしたらよいだろうかというのが村の問題というわけだ。さあ、だいぶ涼しくなつてきたから、畑をみまわりながら散歩してこよう。わからないことは、歩きながらたずねたまえ。」

三人は畑の方へ歩いていきました。畑にはトマトやきゅうりが今をさかりとなつていました。三郎君たちがいていねいにお礼をいつておにいさんとお別れしたのは、それから三十分ぐらいあつた。三郎君たちは、なんだか急に考えがひらけたような氣がしてきました。田や畑で働いている人たちが、作物や、通りすがりの家々のことが、そのま

ま村の問題なんだ、と思うと、たのもしいような、また心のひきしまるような気がしてゆかいでした。

次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょう。

- 1、夏休みの計画を立てること。
- 2、養蚕のことをしらべてみることに。
- 3、山の地方の産業についてしらべてみることに。
- 4、とくに山の森林を中心とする産業についてしらべてみることに。
- 5、生糸と人造せいの長短をくらべてみることに。
- 6、夏休みの間の家事の手つだいのしかたをくふうすること。
- 7、農村・山村・漁村に分けて、そこで行われている副業をしらべてみることに。
- 8、家業の種類や、他の職業との関係をしらべてみることに。
- 9、村にある工場を見学して、原料のくる土地や製品を出す土地のことをしらべてみることに。
- 10、傳染病の予防の施設をしらべてみることに。
- 11、村の人たちの楽しみと、そのための施設をしらべてみることに。
- 12、自分の村では今どんなことがいちばん問題になっているか、それはどんなにして解決されるかを考えてみることに。
- 13、市町村の政治をする機関についてしらべてみることに。

六、夕御飯のあと

八月もなかばを過ぎると、もう暑さも峠をこしたようです。進君の家では、あけはなした涼しい座敷で、楽しい夕御飯がはじまっています。夕日はまだえんがわのガラス戸にさして、ひさしの下にのぞいている空のうろこ雲が、もも色にそまって光っているのがたいそうきれいです。進君がからだをずらしてみますと、太陽は低い峰つづきの西の山にまだ半分かかっています。進君は夏休みの少し前から、夕日がちようどあの山に落ちてしまう時刻を、たんねんに書きつけています。少しずつ沈む位置がずれていくのや、しだいに日あしが短かくなっていくのがわかつて興味があります。

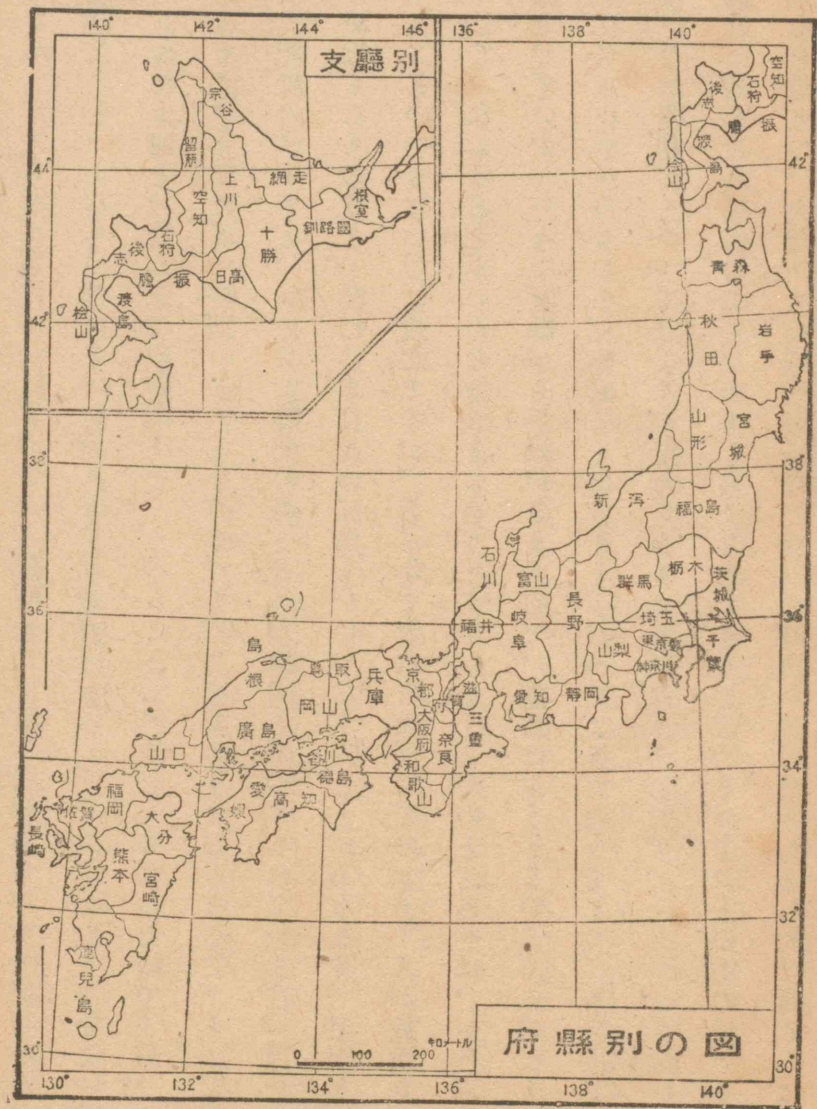
にぎやかな食事がすみ、みんながお茶を飲みだすころになると、いつもラジオの英語会話がはじまります。この時間には、進君の家では一家そろって勉強をすることになっています。進君もはじめはとてついてもついていけないと思つたのですが、このころになつて、さいしょとくらべてみると、自分ながらさうとう進んだことがわかります。毎日毎

日かかさずきいていたのが役に立ったのでしよう。このへんではめつたに外國の人にも
会わず、残念ながらまだ実地のためす機会がありません。しかし進君にとっては、英語
を使つてみることで、英語と日本語のちがいを考えてみることに興味がありま
した。もちろん外國のことばをおぼえるのはたいせつなことです。けれども私たちのふ
だん使うことばについても、みんな一度話しあつてみるのがおもしろいではありませ
んか。ことばには通じるようで通じないところがあります。ときには、どうしたらいち
ばんよくわかつてもらえるか、ということを考えてながら話してみる必要があるでしょ
う。ラジオのできたことは、遠くはなれた人たちのことばや考えを、どんなに通じやす
くしたことでしょうか。しらべてみますと、進君の学級では、ラジオのある家は三分の
一にたりません。ためになるよい放送だけでもいっしょにきけたらと、進君や三郎君は
だいぶ前から頭をひねっています。

七時のニュースがはじまると、進君は立ちあがつて郵便さしからきょうの郵便物をと
つてきました。郵便のかかりは進君です。今晚はおとうさんのところへ手紙が三通、お

かあさんとねえさんへ葉書が一枚ずつです。郵便物には消し印があるもので、何日かかっ
て届いたかということがたいいわかります。進君はさいしょ、ふとしたことから、差
し出された土地と、着くまでの時間とをくらべることに興味をもちだしたのですが、こ
のころでは、そのために特別のノートをつくつて記入するようになりました。そのなか
には、記録のページと、かかった時間の表と、日本地図とがつくられています。遠いと
ころからくるものなど、時にはふだんの二倍もかかつてくることがあります。原因をし
らべることのできないのは残念ですが、ラジオで大水や大雪などのニュースが放送され
たりして、なるほどと思ひあたることもあります。おとうさんのところへは、お仕事の
関係で、ずいぶん方々の府縣から手紙がきますので、進君はもうどこからくるのでも、
いく日ぐらいかかるものか、おおよそのけんとうがつくようになりました。おとうさん
もなかなか便利だといつて、よくたずねられるようになりました。

進君はだんだん通信のことがおもしろくなつてきました。それで、上の山のいさん
から本を借りて、大昔からの通信の話や、発達の歴史を読んだりしました。近ごろは郵



便がおそくなったといわれますが、昔にくらべれば、まだまだ問題にならない速さです。通信の方法は交通機関の発達によつて、しだいに進んできたといえます。しかし必ずしも交通機関ばかりでなく、電信電話やラジオが発明されたので、船や車のかよわない所でもすぐ話しあうことができるようになってきました。世の中のできごとを知るために、いま私たちのいちばん手ぢかにあるのは新聞です。三郎君は明治時代の新聞の写真を見たことがありますか、ことばもむずかしいし、印刷もあまり美しくありません。新聞は発行部数や内容からいっても、わずかの間にたいへん進歩をしたものです。しかし、最近ほとくにラジオがずいぶんひろがってきました。世界のはてで起つたことがらが、すぐ私たちの耳にはいります。そればかりでなく、実況放送などでは、遠くのことを同時に知ることさえできます。いまにもつともつと便利なものが出てくることでしょう。

進君は郵便を手はじめにして、だんだん考えをすすめるうちに、郵便や電信電話や新聞やラジオが、どんなことに役立つているかという問題にまではいつていきました。新聞やラジオは、ただ新しいことをしらせているだけではありません。おもしろいお話の

記事もあれば、美しい音楽の放送もあります。進君のおかあさんは放送劇がすきで、いつもその番組を楽しみにしていられます。弟の誠君は、野球の放送となるとむちゅうです。だから新聞やラジオは、私たちに楽しい時間をあたえるという働きももっているわけです。

進君は新聞とラジオの役目として二つのことを考えました。私たちに新しいできごとを知らせてくれることが一つで、私たちを楽しませてくれることがもう一つです。ほかには役目はないでしょうか。進君はいく日も考えつかないでいましたが、そのうち「英語会話」の時間を思い出したので、第三の役目に気がつきました。新聞やラジオは私たちを教育してくれます。私たちは新聞でりっぱな意見を読んだり、有益な記事を見たりします。ラジオでも外国語を勉強したり、ためになるお話をきいたりします。これから学校での勉強のほかに、新聞やラジオなどが大きな手助けをしてくれることでしょう。進君は今までだいたいこの三つの働きを発見したので、こんやはそのことをおかあさんやおねえさんに話してみようと思つていました。ちようど夕飯の片づけが早くすんだ

ので、おかあさんやおねえさんも裁縫をしながら進君の考えをきいてくださいました。そしてそのおかげで、ラジオにはまだまだいろいろな働きのあることがわかりました。



たとえば天気予報のようなものも、ずいぶん役に立ちます。都会でももちろん役立ちますけれど、農村と漁村ではとくに大きな働きをもつているといえます。またラジオがひろがってからは、村でもたいへん時間が守られるようになってきました。これは目立たないようでも大きなことです。新聞やラジオの大きな役目はだいたいはじめの三つと考えられるのですが、天気予報や時間の励行のような働きは、まだほかにもたくさんありそうです。進君はいつかそれを表にしてみたいと考えています。

進君はその夜、床にはいると、このように通信の発達した時代に生まれてきたありがたさをしみじみ考えました。しかし新聞やラジオが十分に力を出すためには、どれだけ

たくさんの人の努力がいることでしよう。こんな夜おそくにも電信を打つたり、電話をかけたり、印刷をしたり、記事を書いたりしている人たちがたくさんあるはずです。またこれだけに発達するまでには、どれだけ多くの人の苦心がつみ重ねられてきたことでしょうか。そう思うと、進君は、こうしてゆつくりとねているのが申しわけないような氣さえました。あれこれと考えてみると、通信の方法の発達しなかつた昔はどんな生活だつたらうか、という疑問もわいてきました。今から考えてみればたいへんな不便ですが、そのころの人たちはたいして不自由にも思わなかつたかもしれません。とにかく進君は、昔のこともぜひ知っておきたいと思いました。

次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょうか。

- 1、話しあひのときなどに、自分の考えをよくわかるように人につたえるにはどうすればよいか、考えてみることに。
- 2、読書ノートをつくることに。
- 3、通信のための施設や機關についてしらべること。

七、町からの手紙

夏休みもいつのまにか過ぎて、第二学期がはじまりました。

きょうは学級委員の改選が行われました。三郎君もくに子さんも学級委員になり、級長の山本君もこの学期は学級委員として働くことになりました。新聞の係も、三郎君、くに子さん、はる子さんのかわりに、新しい人たちが三人はいりました。はる子さんはこんどは鶏舎係になりました。大部分の人が新しい仕事を受けて、気分も新しくなつたようです。

学級委員は、さつとこの学期の仕事の計画を相談しましたが、山本君からもくに子さんからも、学級の標語についていろいろな意見が出てまともありませんでした。先生におうかがいする必要もあるので、結局あしたのさいよの時間に、みんなにもきいてみようということになりました。

帰途についた三郎君は、縣道をいつものように小川にそつて、ぼくりぼくりと歩いて

いきました。きょうはくに子さんたちと別です。学級委員としての仕事を考えると、三郎君の心はなんとはなしにはずんできます。あしたからの学級の生活をどういうふうに進めていこうか。この学期の共同作業には何をえらんだらいいだろうか。そう思うと、三郎君の胸のなかには、いろいろな新しい考えが、ちょうど入道雲のようにもくもくとわいてくるのでした。いくてには、白い縣道が、かぎりない希望のようになぐんぐんのびています。むちゅうになつた三郎君は、いつのまにかふだんの悪いくせが出て、くつの先でばんばん小石をけつて、ことにもしばらく気づきませんでした。

家に帰つて自分のへやにはいると、机の上に小包こつぷみが置いてありました。どつしりと手ごたえのあるぶあつい包みです。裏がえしてみると、神戸のおじさんからでした。おじさんからは、夏休みのはじめに一度お便りがあつたきりです。でも、御本だな、と三郎君はすぐに思いました。ていねいに包みをといてみると、とつぜんの贈物で自分をびつくりさせようとしている、いたずらずきのおじさんの顔がうかんできました。いつも明かるい、しかも思いやりの深いそのおじさんが、三郎君は昔から大好きでした。三郎君

にはその小包をひらくことが、遠くにいるおじさんにはんとうにお会いすることのような氣持がしてきました。急に思いついて、井戸ばたへ走つていくと、三郎君はいきなりつめたい水をくみあげて手や顔を洗い、思うぞんぶんうがいをしました。神戸つてどんなところだろう。ひどく焼けたというがどれくらいに復興ふっこうしているだろう。おじさんにはもういいお家が見つかったかしら。三郎君の頭のなかでは、いつかのおじさんのお話お話しがぐるぐるかけめぐっていました。

おじさんからいただいた書物のひとつは、子どもたちのためのお話を集めたものでした。三郎君は、おじさんがなぜこの御本を送つてくださったか、よく考えてみたいと思おもいました。おじさんは去年の夏、いろいろ御苦勞をなさつて、海のむこうの中國から歸つてこられたのです。一年前、歸國してすぐたずねてくださったとき、おじさんはたいへんやつれていられました。でも半月ばかり家で疲れをお休めになつた間に、おじさんは外地の珍めづしいありさまや人情について、いろいろためになるお話をしてくださいました。三郎君がことに心をひかれたのは、戦争がおわつてから、むこうにいた人たちが、

どんなに力をあわせて困苦にうちかつたか、また中國の人たちのなかに、どんなにあなたかい心の持主がいたか、というようなことについての美しいものがたりでした。おじさんはたいそうお話もじょうずで、まるで目に見るように話されたので、じまいには、おとうさんやおかあさんまで加わつて、夜のふけるのを忘れることもたびたびあつたくらいでした。

おじさんのくださったその本には、いちばんはじめに次のような文がのせてあります。

小さい友のために

もうかれこれ七、八年も昔のことでしょうか。ある日、私のところへ、ひよつこり外國から便りが届いたことがあります。うわ書きが見なれない横文字なのと、はつてあつた切手がめずらしいのとで、小さい娘は大得意で私に届けにきました。見ると、たどたどしいローマ字で、ていねいにて名が書いてあります。私にはひと目で、それがアンリという少年の手紙であることがわかりました。

アンリ君はそのころ、まだきつと十になっていなかったことでしょう。私とはじめて知りあつた時が、たしか七つか八つでしたから。海のはるかかなたからはこぼれてきたこの小さな手紙を、てのひらにのせてながめていると、私の胸のなかには遠いヨーロッパの思い出がしずかに流れていきました。私は十年ほど前、勉強のために二年あまりフランスに滞在したことがあります。その間、たいていはパリに住んでいたのですが、時には南フランスのいなかを旅したり、セーヌの流れをさかのぼつてみたりしたこともありましたが。アンリ少年はそのころの小さなお友だちのひとりなのです。アンリ君は、私の数あるフランスの友のなかでも、いちばん心に残るなつかしい友だちです。しかし、そのころにももう、日本にはふたりの子どもさえあつたおとなの私が、どういうわけでこのような小さい友だちをみつけたのでしょうか。きょう、私は、みなさんにそのお話をきいていただきたいと思ひます。

ある美しい秋の午後のことでした。私は大使館の友人の自動車にのせてもらつて、パリの郊外へ散歩に出かけたことがあります。郊外といっても、自動車でたつぷり二時間かかるのですから、あつたりの景色は、もうすっかりいなからしくなつてきます。ちょうど友人に用のある村で車をおりると、友人の帰る時刻のくるまで、私はそのあたりをぶらぶら歩いてみることにきめました。

空は底の知れないほどすみとおつて、少しすつかたまつて浮かんでいる雲が、くつきりと目にしみるようでした。なだらかな起伏をもつた小麦畑の間の白い道の上に、秋の日がいつばいに降りそそいでいます。左手の方には、あまり遠くないところに、四、五軒の農家が見えて、ゆつくりと大

きな水車がまわっていました。進んでいくにつれて、ゆくてに小さく光っている教会の塔が、だんだんはつきり見えてくるようになります。小川にかけられた橋のところでは、つりをする老人も出あいました。こんな時、のんびりした牛のなき声をきいたりするのも、なに楽しいものです。

しかし、めずらしく日ざしが強かったので、歩きつづけていた私は、しだいに汗はむような気がしてきました。それで、とあるくるみの小さな林のなかにはいつてみると、そこは、ちょうど草もあまり深くなくて、腰をおろした感じになんともいえないやわらかみがあるのです。おおむけになつて休んでいると、ほおにふれる草がひやびやとして、夢の國にでもさそわれていくように思われるのでした。

それからどのくらい時がたつたのでしょうか。あまり心持がよいので、いつかうとうとしたものとみえます。低いかん木のしげみを通してきらきらかがやいている太陽は、もうだいぶん西にかたむいているようにも思われます。すつかもつかれのやすまった私は、大きなびをしながらからだを起してみました。

すると、やはりこの林のなかに、くるみの葉かげをあみのように全身にうつしながら、ふたりの子どもが、私の方を見て立っているではありませんか。ひとりは十をこしたばかりとみえる小がら

な女の子です。白い質素なうわぎに、えりにさした黄いろい野菊の似あうやさしい顔たちでした。もうひとりには、目のぼつちりしたかしこそうな男の子で、これはひと目で弟だということがかかります。姉は、片手にくりをいっぱい入れた小さなかごをさげ、もう一方で弟の手をひいていました。外国人がめずらしいのでしょうか。男の子はなにかいたげに姉を見るのですが、女の子はだまつて私を見つめているばかりです。

「ぼうや、くり拾いかい。」

私がおえみながら口をひらくと、男の子はまた姉にめくばせをして、ちよつとうなずきました。「どう、しばらく、おやすみなさい。」

きょうだいを私のかたわらにすわらせるためには、なおしばらく骨を折らなければなりません。しかし、いったん話を始めると、私たちは、すぐなかよしになりました。二、三十分も話しているうちには、私たちは、もうずつと昔からの友だちのようにうちとけていたのです。きょうだいの家はやはりこの近くの農家で、名まえは、姉をルネ、弟をアンリとよぶこともその時知りませんでした。

「おじさん、日本のお話してよ。」

ルネさんはさすがに日本という國のあることを知っていました。

前に一度、日本の人が村にきたことがあるのだそうです。草の上で話はずむうちにも、ふたりは、ポケットから焼いたくりをとり出して、私にすすめてくれました。また、のどがかわいたといいたすと、ルネさんは、大いそぎで水をとりにつけてくれたりもしました。その水のおいしかったことを、私はいまでも忘れません。

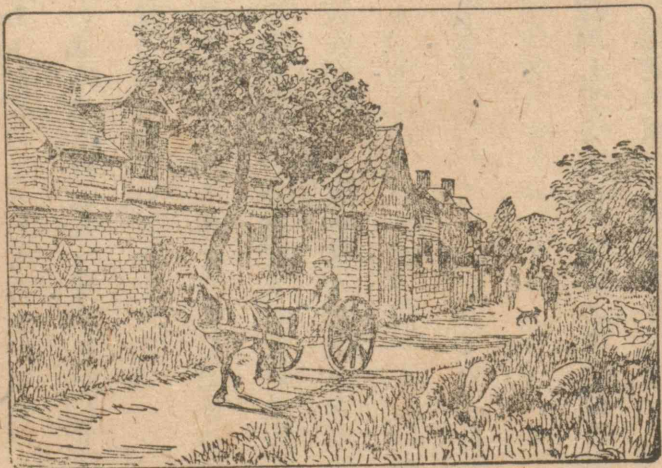
しかし、やがてあしのはやい秋の夕やみが、ひたひたとあたりにしのびよってきました。ふりむくと、西の空がまっかにもえています。ふたりは、せひ家に寄れというのでしたが、私はおそくなるのでまたくる日を約束しました。別れる時、アンリ君はせのびして、私のポケットに、いっぱいくりをつめてくれました。

私はそれから、たびたびアンリ君の家をたずねることになりました。御両親もたいそうまじめな明かるいかたで、いつもあなたかいてもなしを受けました。そのうちアンリ君のきょうだいばかりでなく、そのなかまの村の子どもたちとも、だんだんなががよくなっていきました。みんなで楽しい野遊びをしたこともあります。そんな時、遠いフランスのいなかの子どもたちは、まるで自分が東洋の日本にきてでもいるかのように、耳をすまして私の話にきき入るのでした。

フランスのいなかは、どこもなく日本に似ていると思います。私は子どもたちと話しながら、ときどき日本に帰つたような氣持になることがありました。生まれた國をはなれて、外國に住むさび

しさは、ちょっと経験のない人にはわからないものものです。しかしそのさびしさを、小さな友だちとのあなたかいまじわりが、どれほどなくさめてくれたことでしょうか。住むところも遠くへだたり、話すことばも生活のしきたりもちがつている私たちが、へだてなくあなたかく心をかわすことのできることはありますか。私にはアンリ君たちのなつかしい思い出が、私の心の奥にとぼつて、いつまでも消えないともしびのような氣がするのです。

二郎君はそこまで読んできて、本をとじました。そして静かにあおむけになりました。庭の八つ手の葉には、まだ強い夕日がいっぱいに照りつけています。せみの声が急にうるさく耳につきます。しかし、二郎君の心のうちには、なんとなくしつとりとあなたか



フランスのいなか

ものがわきあがってくるのです。三郎君は目をつむって短かいたため息をつきました。そのしみじみとしたなつかしいものは、おじさんのおもかげのようでもあり、また、いま読んだ人の心の奥にともるともしびといったもののようにも思われます。しかし三郎君には、どこか遠い昔の思い出がよみがえってきたようにも思われるのでした。

その晩、三郎君はおじさんにお礼状を書いてしまうと、いつものように日記をつけました。日記には読んだ本の感想を書きました。本のなかには、お友だちをたいせつにしよう、というお話もありました。三郎君はそれを読んだ時、東京へ帰った信一さんのおかたを思いました。三郎君が日記をつけはじめたのも、もとはといえば、信一さんのおかげでした。その信一さんはいつも、「友だちはだいじなものだよ。」と喋っていられたのです。

信一さんは三郎君より六つも年上です。戦争中疎開してこられて、町の中学にかよっていられたのです。にいさんと同級で、しじゅう三郎君の家へ遊びにこられたのが、三郎君となかよしになるはじめてでした。信一さんは弟がいないので、三郎君をかわいがって、よく遊び相手になったり、散歩につれていってくれたりしました。ふたりでつばめのために住みよい巣をつくってやったこともあります。病気の犬をせわじてやったこともあります。三郎君は、信一さんがいつしよにしてくれたあの二ヶ年ぐらい楽しかったことはないように思います。その思い出は、三郎君の心のおくに、それこそいつまでも消えないあたたかいともしびのようにかがやいでいるのです。

三郎君から信一さんへ

信一さん。こんどの夏休みにはきつときてくださると思つて楽しみにしていたのに残念でした。急に肺炎をおこされたときいたときは、みんなたいへんおどろきました。でもこのあいだ、にいさんからもうだいで元氣になられたということをきいて、やつと安心しました。でもあとがだいじですから、どうか無理をしないでください。

ぼくは、ことしはたいそうおよげるようになりました。もうふたご岩までいって帰ってくるができます。まだ形はよくないのですが、クロールだつてできるようになりました。また波のりもずいぶんじょうずになりました。いつしよにおよいでいただけな

かったのが残念です。ことしはこむらがえりなんかおこすことありませんでした。ぼくがいつも準備運動をやるので、組のなかまや、もつと小さい子まで、まねをするようになりました。ぼくのおしらせしたいのは水泳のことばかりではありません。あまりたくさんあつて、どれから書いていいかわからないくらいです。

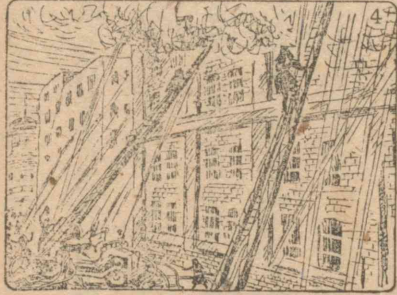
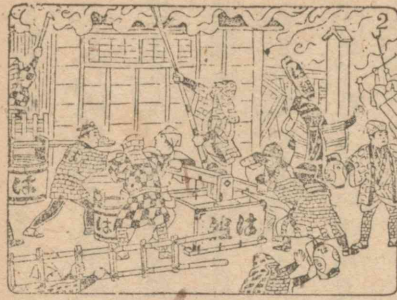
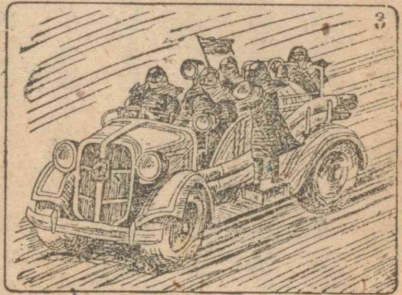
ぼくたちが五年生になつて、みんなで共同していろいろの研究をはじめたことは、もう前におしらせしました。今までのように、なんでも先生におききすればすむというわけにはいきませんし、むずかしいことにもぶつかりますが、みんなで心をあわせてがんばっています。とうとうやりとげたときのうれしさは、ちよつと口ではいえないくらいです。学習がこんなにおもしろいものだとは、ぼくも今まで知りませんでした。

この夏休みの仕事のひとつとして、ぼくは乳牛を飼うことについてしらべました。信一さんが御存じのように、家では乳牛を飼っています。乳牛を飼うことがどんなにたくさんの人たちの役に立つか、またどんな人たちのお世話になつてゐるか、というようなことをしらべて、家業の研究をしたわけです。こんどいらつしゃつたら、見ていただきたい

いと思っています。

ことしはずいぶん牛の草を刈りました。川ぶちの草も、山の草もとりにいきました。朝起きると、もうすぐいさんといつしよに草刈りです。朝露でびつしよりぬれますが、一時間もすると、どうやら朝の分だけはとれます。草をもつて帰ると、今度は町まで牛乳をもつていくのです。夕方涼しくなると、また草刈りです。牛は元氣でよく乳を出しますが、草もずいぶんたべます。夕方の草刈りは、いさんとこうたいすることもありません。その時は、ぼくが畑の草とりです。草とりもずいぶん早くなりましたよ。しかし、おとうさんといさんとぼくと三人がかりでも、田の草、畑の草にはなかなか追いつけないのはびつくりしました。時にはなにかうまい道具はないかしらと考えるくらいです。でもことしは、よその畑に負けるようなことはありませんでした。

さつまいも、もうずいぶん大きくなりました。もう第一回の供出をしましたよ。東京で配給になりましたか。学校のごつごうがいたら、静養かたがたいらつしゃつて、さつまいもやお魚をたくさんめしあがつてはどうですか。ぼくの牛の乳のもんでみてく



ださい。にいさんやおとうさんもそう
いつていられます。そしたら、いろい
ろおもしろいことがあるんですが。

もう一つおしらせすることがありま
す。先月の二十二日に、新田の数夫さ
んのうちでぼやがありました。去年か
ら数夫さんのうちの納屋に、満州から
引きあげてきた準一君たちが住んで
いるのです。準一君たちは草とりに出
て、おかあさんと妹さんがお家に
いたのですが、おかあさんが急に配給
なにかの用で出かけられ、なかなか帰
られないうちに、おなべをかけてあつ

た電気こんろから火が出たのだそうです。妹さんは家の近くに遊んでいたのですが、
納屋から煙が出てくるまで気がつかなかったのです。

子どもたちがみんな、「火事だよう。」と叫んだので、数夫さんのお家の人や近所の
畑にいた人がかけつけて消しました。さいわい数夫さんのお家では、貯水そうに水をは
つておいたので、電気こんろのおいてあった台や、床や壁のほか、ふとんや着物を少し
焼いただけですみましたが、とにかくあぶないことでした。

準一君のところはまさに不自由をするので、電気こんろを使ってとんだ失敗をしまし
た。村の人たちのなかにはだいたいぶわるくいう人もありますが、せまい納屋に親子五人が
住んでいるのですから、荷物は少ないといつてもやはりらんざつになります。それにな
にもかも間にあわせなので、無理ができるのもしかたがないところがあると思います。
それより、準一君たちがいつそう困ることだろうと、お氣の毒でなりません。それに、
そのぼやのあと、無理をなさつたために、おかあさんはからだをわるくされているので
す。ぼくたちは、みんな準一君に元氣をつけることにしました。準一君に、「かれ枝拾

いにいくときは手つだつてあげるよ。」といったら、ほんとうにうれしそうでした。くに子さんたちの意見もあつて、学用品をあげたり勉強の手つだいもすることにしました。ぼくたちが、自分の学用品のなから少しづつ出しあつておみまいにいつたとき、準一君のおかあさんは、やすんでいられたのを起きてこられて、涙をためてお礼をいわれました。ぼくたちもなんだか胸があつくなくて、ことばがつかえました。準一君はしょんぼりしてはくしそうでしたが、出てきてみんなにあいさつしました。

家で準一君のお家のようにすをお話したら、おかあさんも涙ぐんで書いていられました。おとうさんは、運のわるいときには失敗も起るのだ、だからそういうときのなんぎは、みんなで分けあつてあげるのがほんとうだとおっしゃいました。おかあさんは着物をもつておみまいにいかれたようです。

信一さん、ぼくはきょうも砂丘の上ですわつて、青い青い海の色を見ました。太陽がきらきらと水の上にかがやいています。空にはぽつかりとうぎれ雲がうかび、その雲に日がかげると、寄せてくる波のほがらははらとくずれるのが見えたりします。そんなとき、ぼくは信一さんもいつしよにすわつているような気がしてなりません。

こん学期から新聞係をやめて学級委員になつたので、このごろは二学期の学級の仕事についていろいろ考えています。野球の試合や運動会のこともあるし、展覧会や学藝会のこともあるし、とり入れのころの手つだいの計画や、冬のしたくのこともあつて、信一さんがそばで書いてくださればどんなにいいかと思ひます。

信一さんから三郎君へ

ありがとう、三郎君。この夏おたずねできなかったことは、ぼくもたいへん残念に思つています。うっかりかぜをひいたのを無理してこじらせてしまい、みなさんに御心配をかけました。母は養生のためにも出かけてみたらといったのですが、半月以上もねて、すっかり予定をくるわしてしまいましたので、三郎君にはわるいと思ひながらやめたのです。冬休みにはせひおじやましたいと思つています。

今までのお便りで知らせてくださった三郎君たちの活動は、どれもこれもすいぶんりつぱだと思ひます。とくに、この世の中が人々の助けあいので成り立っている、というこ

との発見は、たいへんうれしく思いました。

三郎君は牛乳をのみにこいといつてくださるのですが、きみが毎朝町にもつていつてくれる牛乳が、ひよつとすると、ぼくがこのあいだ病氣のときにいただいた牛乳であるかもしれませんね。なかなかそううまくいくはずはありませんが、三郎君が牛乳を集乳所へもつていつてくれなければ、東京へくる牛乳もそれだけ少なくなり、ぼくみたいな臨時の病人のところまで配給してもらえなかつたかもしれません。三郎君はきつと、夏休みの研究で、きみのお家の牛乳がどこへはこばれていくかを知ったことと思います。しかし、結局どんな人がのんだかまではわからなかつたでしょう。

しかし、牛乳というもので、遠くはなれたふたりが結びついているのはなかなかおもしろいことです。ぼくは牛乳をのんだとき、これがぼくの口にはいるためには、どんなにたくさん人の手がかかっているかを考えてあげたいと思いました。三郎君のような人もいれば、消毒をしたり、都会へ運送したり、ぼくの家にとどけてくれたりする人もあります。もつと考えていくと、牛を育てたり、びんをつくつたりした人もいるはず

です。牛乳ばかりではありません。いま机にむかつて手紙を書いている自分のまわりをちよつと見てみただけでも、ぼくひとりで行ったものなど、一つだつてないといえます。もう考えてみると、私たちの生活は、非常にたくさんの人々の生活としっかり結びついているということができそうです。どの品物のうしろにも、それをつくり出したたくさんの人たちがひしめきあっています。たとえてみると、私たちは、この社会の中で、ちよつと網の目のようになって生きていくといえるではありませんか。

三郎君、私たちはまだどれほど世の中の役に立たないにしても、やはり網の目の一つであることにまちがいはありません。網の目は助けられるばかりでなく、また助けなければいけないものです。見ず知らずの人だからといって、知らない顔をすることはありませんね。汽車でのりあわせたり、道で会った人たちでも、やはりたどつてみれば、網の目の上からは親類なのですからね。

でも三郎君、私たちはこのような網の目でつながっているばかりでなく、また祖先と子孫という形でもつながっています。三郎君が生まれたのは、おとうさんとおかあさん

がいらっしゃったからです。そのおとうさんにはまたおとうさんとおかあさんがあり、おかあさんにもおとうさんとおかあさんがいられます。そういうふうには、ずっとたどつていくと、きみの祖先は、おどろくほどたくさんの人たちだということになるでしょう。しかもよく考えてみると、いつかこの世の中に生きていた祖先のひとりひとりが、やはり私たちの現在の生活にいろいろたいせつなつながりをもっているのです。乳牛のことを例にというと、よい乳をたくさん出す牛をつくり出すためには、ずいぶん長い年月と多数の人々の苦心とが必要です。ですから、現在牛を飼つたり、牛乳を都会へはこんだりしている人の働きのほかに、そのように牛乳の改良ということに力をつくした人の働きもみのがしてはならないと思います。いろいろな進歩や発達は、結局、人間の共通の財産をふやしていくということなのです。そのために努力した人々に対しても、さきにつた綱の目というものを、ひろげてあてはめてみることはできないでしょうか。そうしてみてはじめて、じつさいの社会の姿が考えられてくると思います。

一本の鉛筆^{ペン}をとりあげて考えてみても、このようにくみあわさつた綱の目ははつきり

わかると思います。どれだけたくさんの人たちの苦心や骨折りが、小さな鉛筆のなかにこめられていることでしょうか。それを考えれば、私たちはいつときもぼんやりすごしてしまうことができないと思います。私たちは、数知れないほどたくさん祖先がなしとげた仕事のつみ重ねの上に生活しています。私たちがそのような恩恵^{おんけい}を受けているということには、またそれだけ重い責任があるのです。綱の目ほどこまでもどこまでもつながつていますが、またいつもわれわれが出发点に立っていることを忘れないでください。

この世の中が人々の助けあいだ、ということにはまちがいありません。しかし、そのことは、もういまのままです。その助けあいが十分だということではないでしょう。それだからこそ、私たちがおたがいに責任を重んじて、努力していくことが必要になるのです。もつともつと、あたたかい人間らしい助けあいがなくてはいけないと思います。それでは、人間らしい助けあいとはどういうことをいうのでしょうか。それはみんなが自分たちの助けあいということをよくよく考えて、だれにでも心からしんせつがつくせるようになることだと思います。近所の人たちはもちろん、他の地方の人や外国の人々ともよ

いお友だちになることだと思えます。そのような世の中では、争いということも、貧乏ということも、きつとなくなっていくにちがいありません。

準一君とおかあさんはたいへんお氣の毒です。そういう人たちにとっていちばんありがたいのは、人の心のあたたかさということでしょう。三郎君たちの仕事はたいへん尊いと思えます。準一君が早く元氣になるように、できるだけはげましてあげてください。決してあわれんであげるものではありません。そのような不幸にあわれた準一君に心から同情して、元氣に立ちあがっていただくために、よろこんで力になるのです。昔はお金持だからといっていばつたり、貧乏人だからといってえんりよしたりした子もありました。どんなことでも、世の中のためになる仕事をまじめにつとめている人は尊いように、そまつな身なりをしていようと、りつばな子はりつばなのです。しかし私たちは、まだちつばけな負けん氣やねたみにとらわれて、町のものがいなかの人をうらやんだり、いなかの人が町のもの不平をいったり、同じ村の中でさえいみあうことがないとはいえません。でも私たちはいつも、あの大きな網の一つの目であることを忘れないで、

かたくかたく結びつき、大空のようにひろいあたたかい心を養っていきましょう。私たちの團結、それが新しい日本の姿です。

次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょう。

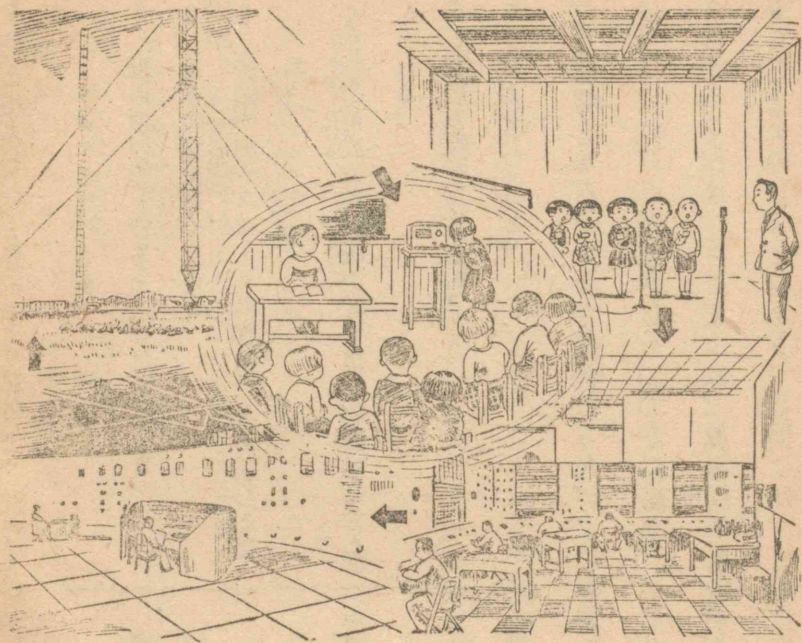
- 1、自分の学級の役員選挙はうまくいっているかどうか考えてみることに。
- 2、二学期の学級の仕事の計画を立てること。
- 3、遠い所に住んでいる親類の人の表をつくること。
- 4、外國の人たちの人情や風俗のことを、外國にいた人にきいてみることに。
- 5、外國人との交際のしかたについて考えてみることに。
- 6、疎開の人たちや引きあげの人たちが、どんなことに不自由をしているかしらべてみることに。
- 7、村で起りやすい火事の原因と予防法をしらべてみることに。
- 8、人と人とを心からむすびつけるのをさまたげる、さまざまの偏見やせまい心持をとりのぞく方法を考えることに。
- 9、遠くにいる友だちに手紙を書くことに。
- 10、公共の機關をできるだけ多くあげ、そこではどんな人たちが働いているかしらべること。

八、新聞やラジオのなかつた時代

毎日雨がふりつづいて、またつゆがきたようです。三郎君は、けさ教室にはいると、おもしろいものを見つけました。教室のなかにマイクロフォンとラウドスピーカーが置いてあり、放送局の絵が掛けてあつたのです。さきにくたものが、マイクロフォンの前で何かいうと、ラウドスピーカーがそれを大声につたえています。みな思い思いのことを放送してみているのです。

進君がにこにこして、こんどラジオのことを勉強するのだといっています。進君たちは、きのうの日曜日、学校にきて先生のお手つだいをしたそうです。

先生がおみえになつて、みんなで研究すること、やってみることがまりました。そして仕事のわりあてについても話しあいました。放送する劇の脚本をつくる組も、ラジオのことをしらべる組も、マイクやスピーカーの取扱いかたをならう組も、放送局のことをしらべる組もできました。三郎君はすみ子さんといつしよに進君を手つだつて、新



聞やラジオのもつている働きと、そういうものがなかつた時代に、そのかわりをしていたものについてしらべることにしました。

進君は前から郵便のことをしらべていたのですが、夏休みに新聞やラジオのことをいろいろ考えて、次のような表をつくっていました。そして昔のことをしらべようといいたのです。進君の考えは、むずかしいという人もありましたが、三郎君も、このあいだから、昔の人たちはどんな生活をしていたかということ

を考えてみたいと思つていたので、進君といっしょに研究することにしました。

ラジオのはたらき

- 1 世の中のできごとを人々に知らせる。
- 2 人々の意見をつたえる。
- 3 音楽や劇やスポーツの放送で人を楽しませる。
- 4 時事解説や英語講座などで、勉強させてくれる。
- 5 天気予報を知らせる。
- 6 時刻を知らせる。

新聞のはたらき

- 同じ。できごとの種類が多いが少しおそくなる。
- 同じ。
- お話や小説、劇やスポーツの記事で人を楽しませる。
- 論説や学藝欄などで、いろいろな学問を教えてください。
- 同じ。
- 毎日の層を知らせる。

三郎君とすみ子さんと進君の三人が、この表をラジオの番組や新聞の記事とあわせてしらべ、いろいろと話あつてみた結果、もうひとつ大きな働きのあることに気がつきました。それは、ラジオでは、放送局や役所からのしらせ、ことに配給とか、人を求めることとかのしらせがあり、新聞には、そのほかに、会社や商店の廣告がのせられてい

るということです。

それから三人は、現在このようにラジオや新聞の受けもっている仕事で、昔はどんなものによつてはたされていたかをしらべていきました。めいめいで本を読んだり、雑誌を見たり、おとうさんやおかあさんからお話をうかがつたりして、それを帳面に書きぬき、おたがいにくらべあわせ、まとめて学級の人たちに報告して、意見をきくことにしました。報告をする日はまだきまつていません。

次の文は、三人の研究を、進君がまとめたものです。

ラジオや電信電話・郵便・新聞などが、世の中のできごとを知らせる働きをはじめたのは、わが國ではまだ近ごろのことです。

ラジオ放送の開始 大正十四年（一九二五）

電信のはじまり 明治四年（一八七一）

電話のはじまり 明治十年（一八七七）

海底電線の敷設 明治八年（一八七五）

郵便制度の制定

明治四年（一八七一）

日刊新聞の発行

明治二年（一八六九）

鉄道の開通

明治五年（一八七二）

自動車の輸入

明治四十年（一九〇七）

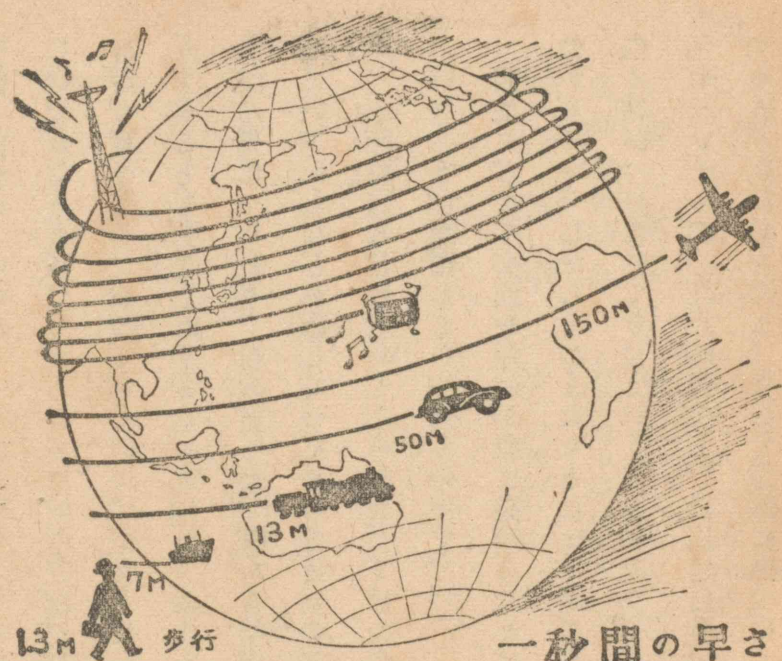
航空郵便
旅客航空

昭和四年（一九二九）

だから江戸時代でも、はなれた土地の人にできごとをくわしく知らせるには、馬とかかごにのって使いの者がかけつけるのがもつとも早い方法でした。今から二百四十年ばかり前、江戸をたつた早かごが、東海道を夜を日にいで走り、六六〇キロを少しの休みもなくリレー式に走り通して、播州赤穂あきおについたのが四日のちだったといひます。それがそのころのレコードでした。手紙でしらせようとしても、その土地へ旅行する人がみつかるまで待つていなければなりません。大名とか大きな商人とかは飛脚おんあしというものを使いましたが、これも人がもつていくのですからずいぶん日数がかかりました。昔は、いつぱんの人はそう遠い土地のことを気にしないで済みました。だからあまり

手紙も書かず、用のあるときは、自分でかけていつてすませていました。世の中の新しいできごととも耳づたえにきくほかに方法がなく、それだけでがまんしていたのです。耳から耳へとつたわつていくのですから、だんだん話が大きくなりました。まちがつたりすることも少なくありませんでした。話は人のいききの盛んな宿場しゆくばとか、町などにいちばん先につたわり、村の方へは、町から物賣りにきた商人や、村から町へ品物をはこんでいった人などを通してつたわつていきました。諸國しよこくを行商してあるく薬屋くすりやとか呉服屋こふくや、小間物屋こまものやなどは、おもしろおかしくほかの土地のありさまを人にきかせて、それをあいきように商賣していったものです。

明治になつて交通や通信が急に発達したわけは、外國の進んだ方法を学んでとりいれたからです。しかしそのまたもとには、國じゆう世界じゆうが、昔にくらべてはるかに強く結びつけられてきたということがあります。昔は人がせまい土地にたてこもつて生活していました。江戸時代でも、農民は自分の土地をすてて他の土地に移ることがたやすくはできなかつたし、まして海外に出ていくことなどは思いもよみませんでした。そ



一秒間の早さ

んなふうですから、国内の交通や通信の方法もあまり進歩をしませんし、まして外国との交通や通信などは、ほとんどなかったのです。それが明治からあとは、日本国じゅうが一つになり、昔のように藩と藩との間の強いしきりがなくなったので、関係の深い土地と土地とをむすびつける交通や通信が発達してきました。そして交通や通信が発達するにつれて、また土地と土地とがいよいよ密接な関係をもつようになりました。外国と日本との交通や通信も、これとまったく同じです。

交通や通信の発達ということを考えにいと、土地の遠いとか近いとかいうことはかんたんにいえなくなります。たとえば、ここから山のかいこん地までは八〇キロしかありませんが、東京よりは郵便がくるのに日数がかかるし、使いを出しても三日がかりになってしまいます。だからむしろ、東京の方がかいこん地より近いといつてもよいわけです。昔の日本の國は、ばらばらにわかれた、すみからすみまでたいそう日数のかかる廣い國でした。それが今では、一つのまとまったせまい國になってきたのです。これは他の國々でも同じことですし、世界ぜんたいについてもいえることです。昔は夢にも見なかつたような遠い土地が、もうとなり近所になってきました。アメリカで流行している音楽が、あつというまに日本のすみずみまでいきわたったり、日本に大地震があつたということが、もうその日のうちに世界じゅうに傳わつて、しんせつなおみまいを受けたりすることが起つてきました。

ラジオや新聞は、世の中のできごとをしらせるというだけではなく、國內の各地、あるいは世界の各地をむすびつける働きをしています。こういったものなかつた時代に

は、人々はみなその土地その土地にわかれて、別々の生活をしていたわけです。それは静かであつたかもしれませんが、せまい單調な生活であつたと思われれます。

次の文は、三人の研究を、すみ子さんがまとめたものです。

ラジオや新聞には、人々に楽しみをあたえてくれるという働きがあります。ラジオは音を通して、新聞は写真や絵や文字を通して、私たちに楽しみをあたえてくれます。

ラジオや新聞のなかつた時代にも、人々は音を通して、また絵や文字を通して楽しみを味わなかつたわけではありませんでした。ただそれは、その土地土地にかざられたものが多かつたようです。村では琴やしゃみせんをひける人もめつたにいませんでした。だから音による楽しみといえば、田うえ歌とか茶つみ歌などの民謡を歌つたりきいたりすることのほかには、お祭りのときの笛とか太鼓があるくらいのものでした。音だけの楽しみではありませんが、しばいなども、村ではときに自分たちでやってみるくらいで、ごくまれに旅藝人でもまわつてきたときには、村じゅうの人が見にいったそうです。ラ

ジオでしばいを見ることはできませんが、放送劇などをきいていると、なんだか目に見えるような氣さえして、つくづく便利になつたと思います。

新聞や雑誌がなかつたのですから、絵や文字を通しての楽しみは、絵草紙とか書物とかによつたのです。江戸時代になつてからは、木版の印刷が行われましたから、村のほうにも、少しはそういった本がはいつてきました。種類も部数もごく少なかつたのです。だからおもしろい話などは、人にきかせてもらつたり、人の集まつたときに話してつて楽しみました。同じ江戸時代でも、町に住んでいた人たちは、その点ではよほど楽しみが多かつたようです。琴やしゃみせんをひく人も多いし、うたいとか長うたとかいったものをうたう人も多く、寄席にいつてびわをきいたり、講談をきいたり、しばい小屋へいつてかぶきやおどりを楽しんだりすることもできました。絵草紙や書物も町では手に入れやすかつたようです。そのかわり、町の人たちのなかには、遊びにふけて家の人たちにめいわくをかけた人もありました。

村では、そういう楽しみは少なく、あつても單調でしたが、田や畑、あるいは海や山

の仕事のあいまあいまには、物日というのがあつて、その日は仕事を休んで、餅をついたり、料理をつくつたりして、おたがいによんだりよばれたりして楽しみあいました。そのうちでも、お正月とか、鎮守の祭とか、お盆とかは、いちばん楽しい時でした。村の人たちの楽しみには、きちんとしたきまりがあつたようです。このごろは、新聞やラジオのほかにも、蓄音機もあり、映画もあつて、どれもみな村の生活にいきりこんできたので、村の人たちの楽しみかたも少しづつかわつてきています。

次の文も、三人の研究を、三郎君がまとめたものです。

ラジオや新聞は、いろいろ役に立つことを、おとなにも子どもにも教えてくれます。それも、学校で教えてもらうのとは、少しうすがちがつています。おもに、その時々々の生活にすぐ役立つようなことで、順序立っていないのがふつうです。季節の草や木の手入れ法とか、季節の料理のしかたとか、時事問題の説明とか、みなそうです。

このようなことは、ラジオや新聞のない時代でもだいじなことでした。日々の生活にすぐ役立つようなことがらは、おたがいの話しあいのうちに教えられていたものです。若いものどうし年よりどうし、ときには両方がいきりまじつて話しあうよりあいの場合とか、仕事のあいまのひとやすみのとき、夕涼みのとき、そういうときに教えあつたのです。物知りの年よりや、學問のある人、珍しい旅人などが話し手になります。こういうのを耳學問といっていました。

またラジオや新聞は、私たちの知識をひろくしてくれませんが、昔の人たちは本をよんだり耳學問をするほかに、じつさいの社会のようすを見るために旅行に出かけていきました。職人などはほかの土地の親方の所へ出かけていきましたし、ふつうの農民や商人はお宮まいりとかお寺まいりといつて旅に出ては勉強をしました。高いけわしい山の上のお宮におまいりしてこないうちは一人前に取扱つてもらえないとか、一生のうち一度はお伊勢まいりをしなければいけないとか、かわい子には旅をさせろとかいうこともその意味からいわれたのです。旅行は費用もかかるし、ひとりでは心細いので、講といふものをつくつて共同して費用をつみ立て、なかまが何人ずつかでこうたいしてでかけ

たり、一同でいつしよにいたりしました。このふうは今でもだいぶ残っています。

今のような学校は明治になってからできたものです。江戸時代もなかばごろまでは、ふつうの子どもたちに、読み、書き、そろばんを教える寺子屋や、裁縫を教えるおしじょうさんというようなものはありませんでした。だから、昔は、家の仕事を手つだつたり、奉公にいつたり、または旅に出たりして、じつさいについて学ぶのが勉強のおもなもので、それだけしかしなかつた人も多かつたようです。

三郎君たちは、このようにして、ラジオや新聞のほかの働きについてもしらべています。いまはラジオの時間を知らせる働きについて研究しています。ラジオの発達する前は、号砲（ドン）といつて、となり町で正午に空砲をうち、みなが時計をあわせていたということ、それよりも昔、江戸時代には、ふつうの家には時計がなく、お寺の鐘が時を知らせる働きをしていたこと、などがわかりました。また昔の時刻のよびがたもしらべました。ただ、お寺ではどんな方法で時刻を知つたのか、どんな時計を使つたのかは

はつきりしないので、なおしらべているところですよ。

広告や天気予報についてもだいたいしらべることがありそうなので、三人は今までの研究についての話しあいを早くしてもらえるように、先生におねがいしようといつていきます。

次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょう。

- 1、ラジオの番組や新聞の記事のひとつひとつについて、どんな働きをしているか考えてみることに。
- 2、自分の町や村の通信や交通の発達の歴史をしらべてみることに。
- 3、日本と他の國との交通や通信に必要な日数をしらべてみることに。
- 4、村の人々の楽しみを昔と今とくらべて表にしてみることに。
- 5、自分の住んでいる土地の物産を表にして、他の土地の人たちのつくつた表とくらべてあわせてみることに。
- 6、正しい知識をえるのに役立つもの（ラジオ・新聞等）を書きならべ、その長短を考えることに。
- 7、書物の歴史、および書物のない時代の記録の方法についてしらべること。

- 8、昔の旅行のありさまをしらべること。
- 9、いろいろな時刻の知りかたをしらべること。
- 10、いろいろな天気予報の方法をしらべること。

学校へいく路

冬になって氷がはると、

冬になって雪がふると、

学校へいく路は長くさびしい。

その路を生徒がいく。

だが、また、ゆかいな夏がきて、

鳥がなき、果実がみのり、花がさけば、

学校へいく路は、なんて短かいのだろう！

たのしい時間が、なんとはやく過ぎることか！

しかし、勉強がすきで、

ちえをえようとはげむ子には、

学校へいく路は、いつでも短い。

照る日も、雪の日も、また雨の日も。

どの子も、どの子も、心はけだかく、

何をするにも心をこめて、

いつ話すにも心やさしく、

すべての人のよろこびとなれ。

どんなところにいるときにでも。

(附)

教師及び父兄の方へ

一、第五学年の児童の生活には、次のような問題が横たわっていると考えられる。これらは、教師や父兄にとつては、児童に対するさまざまな期待や注文の根本になつていゝもので、児童に理解させ解決させたい問題である。また児童自身にとつては、日々の生活にいかかわり立ちかわり現われてくる、さまざまな意図や疑問の源泉であつて、自分でははつきり意識していない場合もあるが、絶えずその解決を求めている問題である。

問題

- (一) 私たちはどのように勉強すればよいか。
- (二) どうすれば、私たちは自分を安全にかつ健康にすることが出来るか。
- (三) 自分・家・学校・町村・國の財産にはどんなものがあり、どのように保護保全されてゐるか。
- (四) 現代の産業はいかにして発達してきたか。
- (五) 發明発見はどのくらい私たちの生活を豊かにしたか。
- (六) どのようにして私たちは通信したり意見を交換したり旅行したり出来るか。

(四) 外國人との交際にはどのようにして行われるか。

(五) 國家統治にはどんな施設が必要か。

児童の種々な経験は、これらの問題を中心として、豊かになり、深く行つて行く。

二、この本は、児童たちに社会科学習の手かがりを興え、その学習の進め方を暗示しようとして、若干の資料を提出している。しかしその資料は、第五学年の児童に、せひ興えなくてはならない知識を精選して排列したものである。それは範圍からいつても、深さからいつても、たしかに偏している。だから従來の教科書のように考へてはいけぬ。むしろ、児童用の参考書の一種として取り扱つていただきたい。したがつて、この本に書いてあることを、順々に説明したり、暗記させたりしては困る。またこの教科書だけでは十分でもない。その意味でこの本を第六学年の児童が参考にしたり、第六学年の本を第五学年の児童が借りてきて参考にすることもよいことである。

三、児童たちは、恐らく一息に、この本を読んでしまふであらう。そしてさまざまな疑問をもつたり、計画を立てたりするであらう。教師や父兄は、この児童の興味をうまく利用して、前にかかげた諸問題の解決に向け、自分たちの生活を向上する機会を興え、人間生活、社会

私たちの生活（一）
 村の子ども 第五学年用
 Approved by Ministry of Education
 (Date Oct. 19, 1948)

(昭和二十四年度用第一次発行)

昭和二十二年九月十五日 翻刻発行
 昭和二十三年一月十五日 再版翻刻発行
 昭和二十三年十月十九日 修正翻刻印刷
 昭和二十三年十一月二十五日 修正翻刻発行
 (昭和二十三年十一月二十五日 文部省検査済)

定価金 四 銭

著作権所有 文 部 省

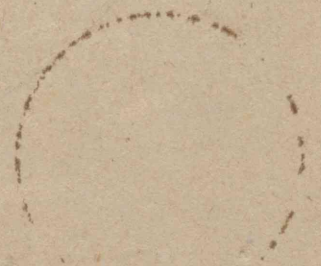
翻刻発行 兼印刷者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社 代表者 長 得 一

印刷所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社堀船工場

発行所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社

生活の理解を深めるように、取り計らっていただきたい。
 四、各章の終りに示した、児童の考えること、実行することは、児童自身の抱いた疑問や計画とともに、教師の計画した学習活動に、児童を導入するきっかけとして利用することができるであろう。そのためには、教師は必要に応じて、この本の適当な部分を指示して児童に精読させたり、その読後感を求めたりすることも、よいと思われる。
 五、この本は、農山漁村の生活に取材しているが、都市の児童もまたそこに、自分たちと関係のある多くの問題を発見することができるであろう。

二
短
集



文庫
48
653

広島大学図書
2000301653



レ
ン
ズ
止
メ
紙
上
壇

C

レンズ止メ紙

エ
リ
ノ

D

外

卷

紙

上
垣

外

卷

紙

ノ リ 付 ケ	ノ リ 付 ケ	ノ リ 付 ケ
レ ン ズ 止 メ 紙	レ ン ズ 止 メ 紙	レ ン ズ 止 メ 紙
(良イ寸法ニ切リ取ル)	(良イ寸法ニ切リ取ル)	(良イ寸法ニ切リ取ル)
ウ	エ	カ
A	B	E